

平成29年度

農業試験場

業務年報

平成30年3月

福井県農業試験場



# 平成29年度業務年報目次

## 1. 研究成果

(1)実用化技術	-----	1
(2)指導活用技術	-----	1
(3)関東東海北陸農業試験研究推進会議へ提出した研究成果情報	-----	1
(4)登録品種・特許等	-----	2

## 2. 研究の概要

### I 戦略的研究開発事業

(1)中山間地における高収益技術体系の確立	-----	3
(2)大規模施設園芸におけるアレンジمام高品質周年栽培技術の確立	-----	4
(3)地中熱利用システムによる周年栽培技術の開発	-----	4
(4)新たな需要を生む機能性ライスの開発	-----	4
(5)ふくいオリジナル酒米品種の開発	-----	4
(6)ブドウの新品種育成	-----	4
(7)スペシャルミディマトの新品種育成	-----	4
(8)福井発の五つ星ブランド水稻新品種	-----	5

### II 農業者ニーズ対応型研究開発事業

(1)水稻の良食味性の科学的解明 ―おいしさの見える化―	-----	5
------------------------------	-------	---

### III 地域科学技術振興研究事業（地域産業・技術振興課）

(1)完熟ウメ‘福太夫’生産・流通技術の開発	-----	5
(2)越前スイセンの切り花品質向上技術の確立	-----	5
(3)初夏どり白ネギの生産安定技術の開発	-----	6
(4)ネギ軟白部褐色条班症状の原因究明と防除技術の確立	-----	6
(5)水田でできるブドウの減農薬・減化学肥料のコンテナ栽培技術の開発	-----	6
(6)生き物にやさしい“ポストこしひかり”特裁技術の開発	-----	6
(7)スマートアグリ技術の開発 ミディマト・パプリカ・夏イチゴ	-----	7
(8)水田を活用した省力果樹生産技術の開発 モモ・スモ	-----	8

### IV 提案型共同研究（H29）

(1)鶏糞燃焼灰の施用基準の策定	-----	8
------------------	-------	---

### V パイロット研究（H29）

(1)玄米品質判定システムの酒造好適米への応用	-----	8
-------------------------	-------	---

(2)エコロジアル(低濃度アルコール土壌還元消毒用資材)による病虫害防除効果の検証 ----- 8

## VI フォローアップ事業 (H29)

(1)ふくいオリジナル小ギク新系統の普及 ----- 9

## VII 予備試験 (H29)

(1)生体情報の測定可否の検討 ----- 9

## VIII その他事業

(1)病虫害発生予察事業(国庫) ----- 9

(2)病虫害防除所運営事業(国庫) ----- 13

(3)農薬抵抗性検定事業(国庫) ----- 13

(4)重要病虫害等侵入警戒調査事業(国・県) ----- 13

(5)土壌保全対策費(土壌環境基礎調査事業) ----- 14

(6)肥料検査登録事業 ----- 14

(7)奨励品種決定調査事業 ----- 14

(8)原原種・原種ほ設置事業 ----- 15

(9)優良種子生産体制確立 ----- 15

(10)中山間地向け果樹苗木育成供給事業 ----- 15

(11)水稻生育指標調査 ----- 15

(12)伝統地場農産物等原種供給事業 ----- 15

(13)試験研究課題化・評価システム事業(経営調査) ----- 15

## 3. 普及指導業務実績

(1)県全域の普及指導活動の支援 ----- 16

(2)いちほまれ栽培技術の確立と普及 ----- 17

(3)優良小麦品種の生産技術および需要の拡大 ----- 17

(4)水田園芸の定着に向けた省力・安定生産技術の確立 ----- 18

(5)ミディトマトを中心とした大規模園芸の経営確立 ----- 20

(6)広域推進主要果樹の生産拡大とブランド力強化 ----- 21

(7)既存花き生産組織の市場出荷誘導 ----- 22

(8)生産性の高い畜産経営支援 ----- 24

(9)水田農業担い手の経営改善支援 ----- 25

(10)6次産業の推進支援 ----- 26

#### 4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

(1) アグリチャレンジLABOクラブ	27
(2) 園芸教室	34
(3) 農業試験場プレスリリース実績	35
(4) 平成29年度 福井県農業試験場技術講座	35

#### 5 農業者、消費者との意見交換

#### 6. 論文、雑誌、著書、発表、広報等

(1) 農業試験場刊行成績書	38
(2) 論文	38
(3) 学会等講演発表	39
(4) 著書	39
(5) 広報	39

#### 7. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞

(1) 職員の国内・国外研修	40
(2) 客員教授の招聘	40

#### 8. 一般報告

(1) 施設	41
(2) 予算	41



# 1. 研究成果

## (1) 実用化技術

No.	技術名	内容	普及対象
1	いちほまれの生育指標と栽培の注意	玄米タンパク含量6.4%以下を実現させる生育指標	いちほまれ生産者
2	いちほまれの特別栽培肥料	有機50%一括、有機50%分肥、有機100%分肥の各施用基準	いちほまれ生産者
3	育苗箱施薬でカメムシ防除！	溶出調整型育苗箱施薬剤の使用による省力的な斑点米カメムシ類防除技術	県内一円
4	初期害虫の育苗箱施薬は4年に1回でOK！	被害発生が危惧される年だけ育苗箱施薬を行う省力低コスト防除技術	県内一円
5	紋枯病は多発田のみで省力的に防除！	収穫機の簡易見取り調査と苗箱への施薬によって、省力かつ効果的な防除技術	県内一円
6	ウメ「福太夫」の収穫時期を色で判別	ビューレ等加工原料用果実の収穫・選果の色指標の「福太夫カラーチャート」	ウメ「福太夫」生産者
7	ウメ「福太夫」の完熟落果予測	胚固化完了期と果実重から落果盛期を予測する方法	ウメ「福太夫」生産者

## (2) 指導活用技術

No.	技術名	内容
1	「いちほまれ」の品種特性	来歴、生産特性、病害抵抗性、玄米品質、食味特性の紹介
2	ウキクサ類の遮光効果による抑草	ウキクサ類による除草効果と留意点の紹介
3	ネギ主要病害虫の防除対策	最近問題となっている褐色腐敗病と主要病害虫の防除対策の紹介
4	水稻栽培への鶏糞燃焼入り肥料の活用技術	従来の土壌改良資材より比較的安価なリン酸、カリを含む肥料の紹介
5	直売所等でのモモ・スモモおすすめ品種	直売所等での販売に有望な品種の紹介（モモ「つきあかり」、スモモ「サマーエンジェル」・「サマービュート」）
6	ナツメの環状はく皮で着果量アップ	着果を安定させるための環状はく皮技術の紹介

## (3) 関東東海北陸農業試験研究推進会議へ提出した研究成果情報

イチオン技術：ソバ小畦立て播種による湿害回避と収量改善

### 【研究成果の概要】

水田で湿害を回避し、ソバの収量が上がる小畦立て播種技術を開発した

### 【普及対象と普及見込み】

装置の導入面積（H34） 1,000ha（県下一円）

（内訳：220ha（福井）， 360ha（坂井）， 240ha（奥越）， 150ha（丹南）， 30ha（嶺南））

#### (4) 登録品種・特許等

##### 1) 品種登録・特許等出願の状況

###### 1. 品種登録出願

品 種 名	植物の種類	品種登録出願年月日	出願番号
いちほまれ	稲種	平成 29 年 4 月 24 日	3 2 0 7 9

2. 特許等出願はない。

##### 2) 保有する登録品種・特許等知的財産一覧

###### 1. 品種の登録

品 種 名	植物の種類	品種登録年月日	登録番号
越のパール	らっきょう種	平成 12 年 10 月 4 日	8 3 7 0
越のレッド	らっきょう種	平成 12 年 10 月 4 日	8 3 7 1
ガーデンスター	ラナンキュラス属	平成 17 年 1 月 19 日	1 2 6 0 9
福太夫	うめ種	平成 17 年 3 月 23 日	1 2 9 8 5
リリライトピンク	ゆり属	平成 17 年 3 月 15 日	1 5 2 1 4
リリレモンイエロー	ゆり属	平成 17 年 3 月 15 日	1 5 2 1 5
リリブライトレッド	ゆり属	平成 17 年 3 月 15 日	1 5 2 1 6
オータムヴィオレミニ	らっきょう種×きいいとらっきょう種	平成 19 年 3 月 2 日	1 4 9 9 3
オータムヴィオレ2号	らっきょう種×やまらっきょう種	平成 19 年 3 月 2 日	1 4 9 9 5
オータムヴィオレ3号	らっきょう種×やまらっきょう種	平成 19 年 3 月 2 日	1 4 9 9 4
イクヒカリ	稲種	平成 19 年 3 月 15 日	1 4 9 9 9
ニューヒカリ	稲種	平成 21 年 7 月 31 日	1 8 3 4 9
まんぷくもち	稲種	平成 22 年 2 月 19 日	1 9 0 5 3
あきさかり	稲種	平成 23 年 3 月 2 日	2 0 4 3 1
越のルビーさやか	トマト種	平成 23 年 8 月 29 日	2 0 9 5 2

###### 2. 特許の取得

発明の名称	特許登録年月日	特許登録番号
電子レンジとポリエチレン袋を用いた低コスト植物無菌培養方法	平成19年 9月14日	4 0 0 9 6 8 5
ラッキョウの根茎部連続切除装置	平成24年10月 5日	5 0 9 7 9 8 0
稔性抑制キク科植物の作製方法	平成25年10月 4日	5 3 7 4 7 8 5

##### 3) 特許の出願

・出願中の特許はない。

##### 4) 実用新案の取得

発明の名称	実用新案登録年月日	実用新案登録番号
梅果実の整列を補助する板	平成21年6月24日	3 1 5 2 0 1 7

## 2. 研究の概要

### I 戦略的研究開発事業

#### (1) 中山間地における高収益技術体系の確立 (H29～31)

作物部 スマート農業研究G 土田政憲

##### ① ICTブルによる緩傾斜地の大区画化と排水性向上

ICTブルを用いた圃場大区画化と均平化については、農試場内圃場と現地圃場2か所で行った。場内圃場の均平化については、均平前の圃場高低差は±35mm以内、±25mm以内、±15mm以内の地点数が全体のそれぞれ93%、85%、65%であったものが均平後はそれぞれ98% (+5ポイント)、92% (+7ポイント)、76% (+11ポイント) に高まった。圃場周囲の基準点設定から高低差測定、均平作業までにかかった時間は163分/10aであったが、オペレータの作業熟練度が高まると時間短縮は可能であると思われた。現地圃場の大区画化・均平化については、秋の降水が多く、また冬期の大雪で消雪が遅くなったことなどにより、春作業で行われた。圃場排水性向上についても、ブルドーザの排土板の両側にチゼル幅を10cmに広げたサブソイラを装着し、深さ30cmで補助暗渠を圃場縦横に施工して、補助暗渠同士を、また補助暗渠と額縁明渠とを連結することで圃場排水性の向上が期待できることがわかった。しかし、額縁明渠を崩さないで補助暗渠を接続するためにはサブソイラの装着向きを途中で付け替える必要があるため、付け替えなくとも良いようなサブソイラの形状変更を検討する必要があり、作業性も含めて次年度も検討する。

乾田直播栽培については、場内圃場で額縁明渠と補助暗渠を施工した圃場で播種量を2段階としてトラクタにツーウェイロータリと播種機をセットしてあきさかりを播種した。穂数が少なく収量はやや低下した。播種量を増やしたり、条間を狭めるなど、茎数を早期に確保し、穂数を増加させることが必要と思われた。茎数確保が遅いところでは雑草発生も多くなるようであった。

作物部 スマート農業研究G 奥村華子

##### ② 中山間地域でのドローンを活用した作物の生育診断と栽培管理技術の開発

大麦圃場の播種時に空撮用ドローンにより撮影を行った。100m上空から撮影し、NDVI (植生指数) やR (赤色光) 画像を作成した。実際の土壌データと合わせて、圃場内の土壌炭素量のムラを確認した。

農薬散布用ドローンは、場内圃場で散布性能を確認した。

企画・指導部 経営課 林恒夫・山本和代

##### ③ 里山ビジネス新規品目導入実証

水生植物28種を試験栽培し、生育調査、開花調査のデータをまとめ、生育の特徴を整理した。この中から、生花出荷として有効な品目として、カキツバタ、花ハス、景観形成植物としてはアサザ (在来種) を選定した。

また、これらの品目に対するニーズを明らかにするため、華道協会、花き店、生産者に聞き取り調査を行ったところ、カキツバタは県内の華道家から大きなニーズがあることが明らかとなったが、一般消費者のニーズは弱いと思われた。カキツバタの品質に対する要望は、葉の硬さ、切り花長 (60cm以上)、葉のよじれが無いこと、新鮮さ等が上がった。また、花ハス生産者からは、産地の特徴を出していくためにも、主要品種である”誠蓮”以外の品種 (花色の異なるもの、草丈の大きくないもの) についてニーズがあった。

既存の産地がある花ハス、マコモについて労働時間や生産費を調査した。花ハスは10aあたり労働時間は35時間で、そのうち収穫・出荷作業時間が74%占め、生産費は約9万円/10aであった。産地の課題としては、長年の常時湛水により硬盤が壊れ、作業に支障をきたしていることが上げられる。

マコモの10aあたり労働時間は53時間、そのうち収穫・出荷作業時間が61.5%を占め、生産費は約1万円/10aであった。産

地の課題としては、マコモタケが収穫できるのは全体の2割程で、マコモタケができる仕組みの解明が必要と考えられる。

## (2) 大規模施設園芸におけるアレンジマム高品質周年栽培技術の確立 (H29~31)

園芸研究センター 花き研究G 篠山治恵

短日期におけるアレンジマム生産において、花芽抑制に係る電照時間帯の検討を行ったところ、暗期開始直後からの電照より、暗期開始から8時間後の電照が花芽抑制効果が高いことが明らかになった。また日持ち性に関しては、栽培期間のマグネシウムの施用量を2倍にすることで、夏季出荷のアレンジマムの日持ち性が向上した。

## (3) 地中熱利用システムによる周年栽培技術の開発 (H28~29)

園芸研究センター スマート園芸研究G 佐藤信仁

年3作の周年栽培(1月定植、5月定植、9月定植)で、養液栽培と暖房利用により年間を通じてキュウリ栽培が可能であることを実証した。年間のキュウリ可販収量は28.3t/10aであった。それぞれの作型において最適な品種を検討し、1月定植では‘シルフィーパワー1号’、5月定植および9月定植では‘超・彩軌’が適することを明らかにした。

1月定植と9月定植合算での暖房に要するエネルギーは、地中熱ヒートポンプの利用により、灯油を燃料とした温風暖房機の利用と比較して82.5%の削減となった。また、ランニングコストは39.5%の削減となった。

## (4) 新たな需要を生む機能性ライスの開発 (H28~32)

ポストコシヒカリ開発部 町田芳恵

澱粉特性が特徴的な20系統について理化学分析(アミロース含有率、糊化粘度特性、アルカリ崩壊性)およびリゾット評価を行い、最もリゾットに適する1系統を選抜し、越南300号の地方系統番号をつけた。越南300号はイタリアのリゾット米であるカルナローリより粒は小さいが、粘り・おねばの量、硬さ・歯ごたえ、煮崩れのし難さ、総合評価はカルナローリと同等以上であった。イタリア料理の専門家の評価においても、越南300号はリゾットに適していた。また、高食物繊維米であるA111の玄米および精米の食物繊維含有量はコシヒカリの3倍であることを確認した。

## (5) ふくいオリジナル酒米品種の開発 (H27~29)

ポストコシヒカリ開発部 中岡史裕

酒米育成系統3種について大野市で現地適応性試験を行い、現地での生育特性、収量、玄米外観品質(粒大、心白発現)、成分特性(アミロース含有率、タンパク質含有率)の調査を行った。また、生産物を福井パールライスにおいて、30俵張りの精米機で35%精米試験を行った。さらに、35%精米を業者で製麹試験および醸造試験に供試した。その結果、育成系統の特性を把握し、3種に越南酒296号、越南酒297号、越南酒298号の地方系統番号をつけた。

## (6) ブドウの新品種育成(H27~34)

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 森川知彦・猿橋由恵・赤堀巧・中川文雄

「シャインマスカット」に黒・赤系品種を交配して得た約2,000の系統について、台木に緑枝挿しして苗木を養成した。養成した苗木から945個体を接ぎ木し、選抜圃場に移植後育成を図った。一昨年度から養成した約150系統から、1系統のみ収穫調査を行った。昨年度に養成した約150の系統については、選抜圃場で継続して育成を図った。

## (7) スペシャルミディトマトの新品種育成(H25~31)

園芸研究センター 野菜研究G 西端善丸・高岡弘典

前年度春作と秋作で、ほぼ固定域に達したと見られる系統を用いて作成したF1雑種を、今年度春作と秋作でロックファーム(カ

ネコ) で試作した。同様にスプレーポニック (カネコ) でも比較栽培を行い、収量、品質など結果から、果実色が赤、黄色、オレンジの中から合計6種類を有望な新品種候補とした。親系統の品種固定はF10に到達した。

#### (8) 福井発の五つ星ブランド水稲新品種 (H23~29)

ポストコシヒカリ開発部 小林麻子

「いちほまれ」(越南 291 号) について、植付け時期(連休植え、適期植え、遅植え)、肥料の種類(エコ肥料、有機 50%、有機 100%) を変えた試験区を設け、圃場での生育調査を行った。畑晩播による葉いもち圃場抵抗性検定、高温登熟耐性試験を行った。収穫後は収量調査、品質調査、精米特性調査、食味関連調査、ゲノム解析、メタボローム解析を行った。「いちほまれ」を含む福井県奨励品種の判別用 DNA マーカーを選定した。これらの試験結果は「いちほまれ」のブランド化戦略のための基礎データとした。

「いちほまれ」は平成29年4月24日に品種登録出願を行った(出願番号第32079号、出願公表平成29年7月24日)。

## II 農業者ニーズ対応型研究開発事業

### (1) 水稲の良食味性の科学的解明 —おいしさの見える化— (H25~29)

ポストコシヒカリ開発部 町田芳恵

アミロペクチン生合成に関与する遺伝子 (*SSI*、*SSIIa*、*BEI1b*、*BEI*、*ISA1*) の日本晴またはコシヒカリの突然変異体32系統を栽培し、原品種日本晴とは明らかに異なる食味を持つ3系統、原品種コシヒカリと明らかに異なる食味を持つ9系統を得た。さらに、同じ遺伝子でも変異の入り方によって食味への影響は異なることが示唆された。コシヒカリの遺伝背景にインド型イネ (*T upa121-3*、*BeiKhe*、*Bleiyo*、*Qiu Zao Zhong*) の澱粉生合成関連遺伝子が座乗する染色体断片を置換した8系統を栽培し、7系統について安定してコシヒカリとは異なる食味特性を有することを確認した。登熟気温と食味との関係について、既存7品種を用いて検討した結果、高温登熟によりアミロペクチン短鎖 (DP6~12) が減少し、これが米飯の粘りの低下の一因であることが明らかとなった。この特徴に供試した7品種間で差はなかった。

## III 地域科学技術振興研究事業 (地域産業・技術振興課)

### (1) 完熟ウメ '福太夫' 生産・流通技術の開発 (H28~29)

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 猿橋由恵・赤堀巧

6月5日から24日まで定期的に果実を採取して樹上果の色、硬度、成分の変化および追熟による変化を調査し、手もぎ収穫の指標を作成した。また、生育調査結果と気象データから完熟落果予測式を作成し、ネット収穫の指標を作成した。青果は氷温で1ヶ月程度の貯蔵が可能であったが、貯蔵期間が長くなるに従い低温障害による果実の変色・軟化が顕著になった。冷凍では-10℃だと数ヶ月の貯蔵で果実が変色したが、-20℃以下だと品質が保たれた。冷凍果実を加工する際の解凍温度が低いと褐変し、高温になるほど果皮が剥離した。手もぎ収穫後、直ちに選果機で選別してから追熟すると傷害の発生が少ないが、追熟後に選果機で選別すると傷害が発生して果実が褐変し、商品価値が著しく低下した。緩衝材のネットシートを使用すると、輸送時の果実の損傷が軽減した。

### (2) 越前スイセンの切り花品質向上技術の確立 (H28~30)

園芸研究センター 花き研究G 榎本博之

エチレン処理方法の確立については、4枚葉率向上のために、エチレン処理を行った後の高温貯蔵2週間の効果並びにその後の貯蔵温度について検討し、28℃が適当であった。エチレン処理後の32℃と室温管理での球根の花芽調査を行い、花芽分化段階の速度を調べ、エチレン処理後に高温32℃を遭遇させることにより、花芽分化がゆっくりと進み、4枚目の葉が生長することが

明らかになった。32℃に比べ低い温度の室温では花芽の発育が促進されることから葉の生長が抑制され、不揃いになることが明らかになった。さらに、現地の球根を用いた試験ではエチレン処理の効果が劣り、4枚葉率が下がることが判ったので、高温処理、エチレン処理以前の処理、つまり、掘り上げてから球根をどのような状態で処理するか検討が必要であることが判った。

### (3) 初夏どり白ネギの生産安定技術の開発 (H28~30)

園芸研究センター 野菜研究G 加藤里佳

5~6月どり作型の開発において、肥料の種類と比較試験(スーパーSRコート越冬白ネギ専用733、スーパーロング413、スーパーIB入りエムコートS14号)では、スーパーロングで換算収量2.0t/10a以上、抽苔率5%程度であった。7月どり作型の開発において、播種時期および粒数の比較試験では、「ホホワイトスター」をハウス内無加温育苗(10月14日、11月1日、15日播種)、ハウス内トンネル育苗(12月21日、1月6日播種)で1.5、2粒播種した。10月14日2粒播種の無加温育苗により換算収量3.0t/10a程度、抽苔率0%であった。

### (4) ネギ軟白部褐色条斑症状の原因究明と防除技術の確立(H28~29)

有機環境部 生産環境研究G 本多範行

褐色腐敗病の薬剤以外の防除技術として、土壌への消石灰、緑肥および併用処理は本病防除に有効であった。消石灰、緑肥の土壌処理による病原菌密度の減少、土壌理化学性、土壌微生物多様性の変化を明らかにした。緑肥の種類については、作業性の面からオオムギが有効であった。品種については、夏扇パワー、夏の宝山が有効であった。

ネギの主要病害虫の防除技術として、萎凋病に有効な品種や薬剤を提示するとともに、さび病、葉枯病、ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ等の発生活消長を明らかにし、防除体系を提示した。

### (5) 水田でできるブドウの減農薬・減化学肥料のコンテナ栽培技術の開発(H27~30)

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 森川知彦・赤堀巧

トンネル内に結果枝を収める誘引方法(80cm摘心)を検討した結果、慣行樹と同等以上の果実品質(糖度19度、房重600g以上)が可能であった。窒素成分の半量を有機肥料に置き換えた減化学肥料を検討した結果、慣行樹とほぼ同等の果実品質(糖度18度、房重600g)が可能であった。6月下旬のコンテナ切り離し処理により、「クイーンニーナ」の果皮の着色向上が図られた。コンテナ樹の蒸散測定の結果、生育期間中(6月下旬)にコンテナを切り離す処理は、蒸散量に及ぼす影響は少ないことが明らかとなった。

### (6) 生き物にやさしい“ポストこしひかり”特裁技術の開発(H26~29)

作物部 スマート農業研究G 土田政憲・奥村華子

農試圃場で、品種いちほまれを用いて、高能率水田用除草機の除草効果等を検討した。移植後10日、20日、31日の3回機械除草を行ったところ、幼穂形成期の残草量(残草数や残草風乾重)は無除草区の20~40%となった。箱あたり播種量を60gとした成苗や中苗では3回除草の前後で欠株率の増加程度は2~3ポイントにとどまり、箱あたり播種量80gの中苗よりも低かった。3回除草を行った区の収量は無除草区に比べ1.8倍となった。無除草区の穂数や玄米千粒重は小さく、水稻と雑草との競合が大きかったためと思われる。機械除草による品質低下はみられなかった。

ウキクサが発生する圃場で試験を行ったが、水位が低い圃場ではウキクサが増殖しなかった。ただし、連続してウキクサが浮く圃場では同様の管理でも18本/m<sup>2</sup>まで抑草され、抑草効果が望める。

#### ① 溶出調整型育苗箱施薬剤の斑点米防除効果

溶出調整型育苗箱施薬剤を施用した圃場では、斑点米カメムシ類の発生が少なく、斑点米の発生が減少した。早生品種のハナエチゼンから晩生品種のいちほまれまで、幅広い熟期の品種でも効果があることが実証された。また、生育期間中の薬剤散布のような降雨等の影響もなく、安定した効果が得られることが確認された。

#### ② 隔年防除の現地実証

平成26年に育苗箱施薬を行った南越前町の山間部の水田において、H27～29の3年間殺虫剤の育苗箱施薬を行わなくても、初期害虫の発生量は被害水準に達しないことが確認された。しかし、イネミズゾウムシの発生株率は40%と、次年度は被害水準の50%を超えることが危惧されるため、4年に1回は殺虫剤を含んだ育苗箱施薬をお行う必要があると思われた。

いちほまれにおける紋枯病の要防除水準を検討したところ、紋枯病の発病株率と精玄米重の関係から、5%減収時の収穫期発病株率が40%となることが明らかになった。収穫期発病株率が40%以上の多発田では、翌年も紋枯病による減収が予想されるが、育苗箱施薬が紋枯病に対して高い防除効果を示したことから、移植時の育苗箱施薬の施用により早期防除が可能であると考えられた。また、収穫期発病株率が40%以下の少発田では、発病株率が要防除水準となるまで防除を省略できると考えられた。

#### ③ 生き物に影響の小さい殺虫成分の選定

水田ライシメーターにおいて、昨年施用した育苗箱施用殺虫剤成分に対するアキアカネヤゴの感受性を調査した。フィプロニル区の羽化数は無施用区の1%であり、施用2年目においても極めて影響が強いことを確認した。また、施用2年目の作付け前および羽化直後の土壌について、フィプロニルおよびその代謝物の残留値を分析したところ、フィプロニルの濃度は下がっているものの代謝物の濃度は増加しており、今年の羽化数が少ない要因として代謝物による影響の可能性が示唆された。

#### ④ 特別栽培用肥料試験

いちほまれの特別栽培用基肥一括肥料（有機態窒素 50%、緩効性肥料 100 日タイプ配合、窒素成分で約 9kg/10a 施用）を供試したところ、対照のエコファーマー用一括肥料と同等の収量、品質が確保され、外観品質および食味値はいずれも良好であった。

有機態窒素 50%配合肥料での分施栽培では、昨年度から2か年に渡って穂肥の施用方法を検討した結果、幼穂長 1mm時一括施用でも穂肥分施と比較して収量、品質概ね確保されたため、作業性の観点から一括施用が望ましいと考えられた。

有機態窒素 100%肥料での分施栽培でも穂肥の施用方法を検討した結果、幼穂形成期 10 日前と幼穂長 1mm時の分施体系が収量は最も高く、登熟歩合も良好だったことから、この体系が望ましいと考えられた。

### (7) スマートアグリ技術の開発 ミディトマト・パプリカ・夏イチゴ (H26～29)

園芸研究センター スマート園芸研究G 佐藤信仁・定政哲雄・岩本祐佳

ミディトマトについて、台木品種を比較した結果、収量は‘フォルタミーノ’が最も多かったが、糖度は自根より若干低かった。LEDの樹間照射位置は成長点下 1m と 2m で両者に明確な差はなかった。時期別の糖集積過程を調査した結果、9～10 月は比較的高く安定していたが 11 月からは低下し、12 月中下旬はさらに低下した。1 月以降は上昇に転じた。

夏イチゴは、4月上旬にポット苗を定植することで生育収量が安定し、夏季の夜間冷房、クラウン冷却温度の設定は、従来よりやや高めめの22℃としても収量は変わらず、ランニングコストが低減できることを明らかとした。

パプリカは、夏越し栽培では、5月下旬頃から尻腐れ果、着果不良、芯焼け、うどんこ病、尻腐れ果が多発し、栽培が困難であった。冬越し作型では、最も多収であった品種はサッポロ(赤) 10.8t/10a、コレッティ(黄) 9.8t/10a、マヅナ(橙) 9.3t/10aであった。冬越しで、日の出前、日没後のLED補光により1割程度収穫量が増加した。

#### (8) 水田を活用した省力果樹生産技術の開発 モモ・スモ (H25~29)

ウメ・果樹研究G 中川文雄

樹冠下に反射シート(タイバック)を敷設した樹体から収穫した果実のポリフェノールは、無処理に比較して47%の増加が認められた。

品種比較として、モモは13品種を供試した。もっとも収量が多かったのは「つきあかり」13.8kg/樹で、次いで「陽夏妃」・「なつおとめ」・「はなよめ」が多かった。7月収穫の「夏のかがやき」・「あかつき」および8月末収穫の「スイートビーナス(ネクタリン)」の果重はそれぞれ149g・161gおよび155gとボリュームが不足したが、その他の10品種はいずれも200gより大きく、肥大良好であった。この中から、旧盆需要に応えられる収穫期や生理障害・せん孔細菌病の少なさを考慮して、黄肉種の「つきあかり」をおすすめ品種として選定した。

スモも13品種を供試し、果実を収穫できたのは前年の4品種12樹から11品種19樹に増加した。もっとも収量が多かったのは「サマーエンジェル」8.1kg/樹で、「サマービュート」7.6kg/樹が次いで多かった。前年まで収穫のなかった「あきさやか」は5.5kg/樹と急激に収量が増加した。「サマーエンジェル」・「サマービュート」は果重がそれぞれ122g・119g、糖度が14.3%・13.9%あり、旧盆需要に応えられる収穫期などを考慮して、両品種をおすすめ品種として選定した。これらの情報は「直売所等でのモモ・スモのおすすめ品種」として、指導活用技術に提案した。

## IV 提案型共同研究 (H29)

### (1) 鶏糞燃焼灰の施用基準の策定

有機環境部 有機農業研究G 坪内 均

土壌改良資材の施用率低下やL型肥料の普及によって水田土壌のリン酸およびカリ含量の低下と水稻の収量品質への影響が懸念されている。そこで、従来の土壌改良資材より安価でリン酸、カリを含む鶏糞燃焼灰入り肥料の水稻栽培における春施用の効果を現地土壌3点と農試土壌1点によるポット試験により検証した。その結果、鶏糞燃焼灰入り肥料のリン酸およびカリの肥効はようりんや塩化カリと同等と認められた。

## V パイロット研究 (H29)

### (1) 玄米品質判定システムの酒造好適米への応用

作物部 作物G 笈田豊彦

食味計(TM-3500)による酒米の玄米タンパク質含有率の測定は、ケルダール法との相関係数0.92で、-0.3%のバイアス補正をすることで、特別な機械の改造をしなくても実用可能と思われた。これによる現地五百万石の玄米タンパク質は平均6.9%と想定より高かった。穀粒判別器(ES1000およびRGQI 10B)には心白の検出項目はないが、整粒・乳白・腹白粒の値からおよその心白発現率および心白の形状が推測された。しかし、それらと水浸裂傷粒との関係は判然としない。

### (2) エコロジアル(低濃度アルコール土壌還元消毒用資材)による病害虫防除効果の検証

有機環境部 生産環境研究G 本多範行 高岡誠一

福井市白方町のミディトマト栽培圃場で、半促成栽培終了後の6月22日に0.75%エタノール80ℓ/1㎡を灌注し、7月25日まで被覆し、土壌還元消毒を行った。7月30日に越のルビーを定植し、病害虫の発生調査を行った。処理区の周辺部に根腐

れ萎凋病やネコブセンチュウの発生がみられた。土壌の酸化還元電位計の値も0以下にならなかった。試験圃場のように砂質土壌で防除効果を上げるためには、エタノールの濃度を高くするか、灌注量を増やす必要があると思われた。

## VI フォローアップ事業 (H29)

### (1) ふくいオリジナル小ギク新系統の普及

園芸研究センター 花き研究G 篠山治恵、榎本博之

旧盆出荷を目指して選抜した赤、白、黄系小ギク各2系統において、県内3か所の実証圃で栽培試験を行ったところ、6月の低温少雨等によりH28年度より出荷期にばらつきが生じた。そのうち、白1系統、黄1系統が大野市以外の実証圃で旧盆出荷が可能であったため、今後は低温に関する対策に関する試験等を実施する。

## VII 予備試験 (H29)

### (1) 生体情報の測定可否の検討

スマート園芸研究G 定政哲雄

トマト‘華小町’において、クロロフィル蛍光を周囲光下で連続測定し、環境の変化に伴う光合成の変化把握が可能なことを確認した。茎径や伸長量、開花房位置、葉色値等の変化を調査し、トマトの生育状態を表すのに有効なことを確認した。サーモグラフィカメラを用いて、葉温や果面温度の同時把握が可能なことを確認した。福井高等工業専門学校と開発中である茎径自動測定ロボットの試作機の試運転を行い、トマトの茎葉を傷めずに動作するように改良した。

## VIII その他事業

### (1) 病害虫発生予察事業 (国庫) (S25～)

病害虫防除室

#### ○ 水稻病害虫

育苗期に発生する病害は、育苗期間である4、5月の気温が高かったため、主にコシヒカリにおいて細菌による苗立枯病の発生が目立ち、特にもち枯細菌病が平年に比べ多く発生した。糸状菌では、トリコデルマ菌による苗立枯病の発生が一部の地域でみられた。苗いもちは、一部の地域で発生がみられたが、前年より少ない発生であった。

葉いもちの全般発生開始期は平年よりやや遅い7月1半旬で、7月中旬に進展し、7月6半旬に最盛期となった。6月22日、6月26日にBLASTAMによる葉いもち感染好適条件が出現し、全般発生開始期になったと推察された。それ以降は、7月1～3日にかけて連続して感染好適条件が出現し、感染が拡大し、7月3半旬に進展期となった。葉いもちの発生面積は236haと平年、前年より少ない発生であった。7月10日以降は8月中旬まで感染に好適な条件の出現はなく、葉いもち期間中の感染好適条件の出現回数は少なかった。いもち病の育苗箱施薬は約48%で行われた。早生品種では平年並みの8月1半旬から穂いもちの発生がみられ、8月中旬の発生株率は平年より多く、前年よりやや少なかった。中晩生品種では、初発期の8月中旬では、発生が少なかったが、9月上旬の発生量は平年より多く、前年より少ない発生となった。穂いもち発生面積は986haと平年より多く、前年より少ない発生となった。

紋枯病は、平年よりやや遅い6月6半旬に初発生した。その後、県下全域で水平進展がみられたが、7月下旬の発生面積は平年、前年に比べ少ない発生となった。8月中旬の発生面積は2,864haと平年、前年より少ない発生であった。8月下旬の降水量は多く、9月上旬の中晩生品種では、進展がみられ、発生面積は3,245haと平年並み、前年より多い発生となった。

8月下旬以降は、局地的な豪雨がみられたが、浸冠水した圃場もなく、白葉枯病の発生はみられなかった。

ごま葉枯病は、8月中旬以降、中晩生品種で発生がみられたが、平年、前年に比べ少ない発生であった。

本田初期害虫のイネミズゾウムシ、イネゾウムシ、イネドロオイムシの発生は平年より少なかったが、イネハモグリバエ、イネヒメハモグリバエの発生は、平年より多かった。直播栽培では、キリウジガガンボによる出芽不良の圃場が平年より多くみられ、苗立ちが悪いために播き直しや移植栽培に替えた圃場もあった。鉄コーティングや湛水土壤中直播では、イミダクロプリド水和剤のコーティングを行わなかったところで被害が目立った。

ニカメイガは、坂井地区での発生が多かったが、移植栽培では効果の高いフィプロニル剤やクロラントラニリプロール剤の苗箱施薬剤の普及により減少傾向にある。一方、発生地域は拡大傾向にあり、坂井地区に隣接する福井市の北部や他の地区でも、発生圃場率が高くなっている。越冬世代成虫の発蛾最盛期は5月5半旬で、フェロモントラップでの誘殺数は平年より少なかった。発生面積は403haと平年より少なかった。第1世代成虫の発蛾最盛期は7月5半旬で、発生面積は409haと平年より少なかった。ニカメイガの越冬量を減らすため、前年の秋から、秋期の耕耘と冬期間の湛水が広がり、越冬量の減少や被害株率の低下の効果が現われてきたものと思われる。

斑点米カメムシ類は、冬期間の積雪期間は平年より短く、クモヘリカメムシの発生は前年に比べ増加した。4月下旬～5月下旬の気温は高く、日照時間も長く、カスミカメムシ類の越冬後の雑草地での発育、増殖に好適であった。6月下旬と7月上旬の雑草地の生息密度および7月下旬の早生品種の出穂期における水田内の生息密度は平年より少なく、発生予察注意報は発表しなかった。アカスジカスミカメやアカヒゲホソミドリカスミカメの発生が目立った。斑点米の発生も平年より少なかった。斑点米カメムシ類の発生面積は2,689haと平年よりやや多い発生となったが、発生の多い圃場は、水田内の雑草が多い圃場など一部の圃場で発生が目立った。斑点米は早生品種の等級落ち理由の約50%、中晩生品種では約20%であったが、上位等級比率が約95%と高く、実質の斑点米による格落ちは、1.6%であった。カスミカメムシ類による頂部加害が多かった。早生品種のハナエチゼンでの割れ初めの発生は非常に少なく、斑点米の発生に影響しなかったと考えられる。

また、イネクロカメムシは、常発地の福井市西部でも微発生であった。

セジロウンカの初飛来は平年より遅い7月2半旬で、8月4半旬には県下全域で発生がみられた。6月～7月にかけて県北部の坂井地区や福井地区への飛来が多く、発生が目立った。発生面積は4,303haで、平年、前年より多い発生となった。

トビイロウンカの発生は確認されなかった。

ヒメトビウンカの発生量は平年より多かったが、縞葉枯病の発生はみられなかった。ツマグロヨコバイは平年より多く、6月4半旬頃から県下全域で発生がみられた。

イネアオムシは、平年並みの6月下旬から県下全域で発生がみられ、7月以降は降水量が多かったが、平年より少ない発生となった。直播栽培、晩生品種など、熟期の遅い作型の圃場で、局部的に発生が多い圃場がみられた。

イネツトムシは、平年並みの6月5半旬に初発がみられ、7月下旬の第二世代の被害は熟期の遅い作型に限られ、7月以降の降水量は多く、平年より少ない発生となった。

## ○ 大麦・大豆・ソバの病害虫

### 1) 大麦

オオムギの作付面積は5,290haと前年よりやや減少した。出穂期は平坦部で4月中旬、山間部で5月上旬と平年並みであった。赤かび病の感染時期である4月中旬～5月の気温は高かったが、降水量が少なく、感染に好適でなかった。一部の圃場で発生がみられたが、平年よりやや少ない発生であった。

小さび病の発生は、4月上旬に坂井地区で発生がみられ、5月下旬には発生最盛期となったが、他の地区では発生が少なく、平年より少ない発生であった。

積雪期間は39日と平年より少なかったため、山間地でも雪腐病の発生はみられなかった。

ハモグリバエ類は4月下旬にムギスジハモグリバエの発生を認めたが、前年同様、極めて少ない発生であった。

## 2) 大豆

ダイズの作付面積は1,800haと前年よりやや増加した。栽培品種は「里のほほえみ」に移行し、「エンレイ」は坂井地区で栽培されているが、少面積である。

紫斑病の発生粒率は、約2%と、平年より少なかったが、前年より増加傾向にある。10月上旬までは、紫斑病の発病粒率は低かったが、10月中旬以降の降雨や台風の影響で収穫時期が大幅に遅れ、腐敗粒だけでなく紫斑病も急増した。県内各地でチオファネートメチル剤に対する耐性菌の出現が確認されているため、他の系統の薬剤による防除を指導している。茎疫病は、昨年同様、微発生であった。べと病は8月下旬に、福井、坂井地区で発生がみられ、平年より多い発生となった。葉焼病は8月下旬に福井、坂井を主に各地で発生し、その後、急速に進展した。発生面積は1,590haと平年の約3倍となった。本年収穫されたダイズは、粒が小さく、これは、気象条件による影響が大きいが、葉焼病の多発生も関与しているものと思われる。

カメムシ類の圃場への侵入は7月下旬からみられたが、8月以降も圃場内の生息数は少なく、カメムシ類による被害粒は平年、前年より少なかった。フタスジヒメハムシは初生葉展開期の6月上旬から発生がみられた。生育期間中の発生は第一世代、第二世代とも平年より少なく、黒斑粒、腐敗粒の発生も平年より少なかった。チアメトキサム剤の塗沫処理が全体の約95%で行われているため、フタスジヒメハムシの発生は、年々減少している。ダイズサヤタマバエは、山間、山沿いの地域で発生がみられたが、平年より少ない発生であった。シロイチモジマダラメイガの発生は、平年より少なかった。ウコンノメイガは7月中旬から発生がみられたが、8月中旬の発生量は平年並みであった。ハスモンヨトウは8月下旬～9月上旬に発生がみられた、平年より少ない発生となった。チアメトキサム剤の種子塗沫処理の普及により、アブラムシ類、ネキリムシ類等の発生も少なかった。

## 3) ソバ

ソバの作付面積は約3,800haと前年並みであった。8月上旬以降の断続的な降雨で、発芽や初期生育が悪く、その後も、台風や秋雨前線による、強風と降雨によって、倒伏や不稔が多く、収穫量は激減した。気象条件の悪化により、正常な生育圃場がなく、病害虫の発生は不明瞭であった。

## ○ 野菜・果樹・花卉の病害虫

### 1) 野菜

スイカ炭疽病は7月下旬に初発生を確認した。7月の降水量は少なく、進展は緩慢であったが、8月以降は降水量が多く、防除が遅れた圃場では、進展がみられた。特に、収穫時期の遅い作型では、発生が多かったが、本年は、収穫時期をやや早くする作型で栽培したため、被害の発生は少なかった。つる枯病は、7月下旬から発生がみられたが、その後の進展は緩慢で、平年より少ない発生であった。スイカエソ斑点病、果実汚斑細菌病の発生は確認されなかった。アブラムシ類、ハダニ類は、6月～7月下旬までの高温、少雨により発生が多かった。ウリハムシの発生は少なかった。

トマトの灰色かび病は半促成栽培での初発は4月下旬頃で、その後の進展は緩慢であった。抑制栽培では9月下旬に初発生を確認したが、発生は少なかった。葉かび病の初発生は、半促成栽培では7月上旬で、7月下旬にかけ進展したが、平年よりやや少ない発生であった。抑制栽培では、9月に初発生したが、その後の進展はみられず、平年より少ない発生となった。青枯病は、局所的な発生がみられが、平年より少ない発生となった。黄化葉巻病は、越前市の一部の圃場で発生がみられた。ウィルス病は診断依頼が多く、T SWVやT o MVの発生が確認された。キュウリのべと病は、半促成栽培、抑制栽培ともに平年並より発生が多かった。品種による発生程度の差がみられた。うどんこ病は、半促成栽培、抑制栽培ともに、嶺南で発生が多く、平年並みの発生であった。ネギのさび病は、越冬ネギで発生したものが感染源となり、

秋冬ネギでは、4月下旬から初発がみられた。夏季の高温で発生が抑制され、10月以降の気温の低下とともに発生がみられたが、少発生であった。葉枯病は、7月上旬から発生がみられ、8月以降に進展し、平年より多い発生となった。白絹病は、8月下旬から発生し、初発期以降の気温が高く、降水量も多く、10月にかけて進展した。特に、連作圃場での発生が多く、発生株率が50%以上の圃場もみられた。8月以降の高温、多雨、台風による強風などの影響で、ネギ、キャベツの軟腐病、キャベツの黒腐病、レタスの腐敗病、トマトの斑点細菌病など、細菌による病害が多く発生した。

アブラナ科野菜の根こぶ病などの難防除病害の発生が増加傾向にある。

施設栽培のトマトやキュウリでは、5月～7月の気温が高かったため、アザミウマ類や、コナジラミ類の発生が多かった。抑制栽培ではタバココナジラミの発生みられた。ネギでは、ハモグリバエ類、アザミウマ類の発生は平年より多かった。特にハモグリバエ類は、4月～11月まで多発生が続いた。シロイチモジヨトウは、9月下旬に発生がみられたが少発生であった。秋冬期のアブラナ科野菜では、ハスモンヨトウ、コナガ、タマナギンウワバ、モンシロチョウ等の食葉性害虫の発生がみられたが、平年より少ない発生であった。ラッキョウでは、5月上旬頃のさび病の発生が多かった。白色疫病は平年並みの発生であった。一部の圃場では、ネダニの発生がみられたが、イミシアホス粒剤による防除効果が高く、防除の徹底によって発生が抑制され、収量が増加した。

## 2) 果樹

ウメの黒星病は、平年並みの5月4半旬から発生がみられ、6月中旬から増加した。本年は、防除適期に降雨や強風のため、円滑な防除が困難であった。発生面積は19haと平年より多くなった。かいよう病は4月～5月に、何度も強風が吹き、その後発生が増加し、平年並みの発生となった。灰色かび病は、開花盛期から開花終期までの日数は長めであったが、開花期以降の降水量は少なく、感染に不適な条件であったため、発生は平年並みであった。虫害では、近年増加傾向にあるモンクロシヤチホコは、8月下旬から若齢幼虫の発生がみられ、幹線道路沿いの灯火のある園地で発生が多くみられた。

コスカシバは、50年以上の高齢樹や新平太夫等の発生しやすい品種の栽培が増加しているため、発生が増加傾向にあり、平年よりやや多い発生であった。ウメシロカイガラムシは平年よりやや少ない発生であったが、近年、タマカタカイガラムシの発生が増加している。アブラムシ類は、4月中旬から発生がみられ、果実肥大期の5月の気温が高かったため増加したが、防除の徹底により平年並みの発生となった。ウメ輪紋ウイルスについては、県内のウメ栽培圃場を調査したが、発生は確認されなかった。

ナシでは黒星病は平年より多い発生であり、6月以降に進展し、果実の被害も多く発生した。ナシヒメシンクイガの発生は平年より多く、カメムシ類の発生は平年よりやや少ない発生であった。

カキでは、円星落葉病の発生が多く、8月～9月の降雨によって進展し、果実が着色する頃に、落葉している所もみられた。カキノヘタムシ、カキクダアザミウマ、カメムシ類の発生は平年より少なかった。アメリカシロヒトリは、7月の第一世代幼虫の発生が局部的に多い圃場がみられた。

## 3) 花卉

キクの白さび病は、平年並み、前年より多い発生であった。

キクのアブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類は、5月以降の高温の影響により平年に比べ発生時期が早く、発生量も多く、7月まで多発生が続いた。

7月下旬以降の高温、多雨によって、露地栽培では、根腐れ等の障害により、生育不良で出荷できなかった圃場もあった。

## (2) 病害虫防除所運営事業 (国庫) (26～)

病害虫防除室

病害虫発生予察の精度を高め、効率的な防除を推進するために、40名の病害虫防除員を設置し、いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウンカ類の発生状況調査を行った。定点に病害虫防除掲示板を設置し、情報を提供した。また、農薬販売業者について指導、取締りを行った。

## (3) 農薬抵抗性検定事業 (国庫) (S52～)

### ア イネいもち病菌の薬剤感受性検定 (国・県) (平成29年度)

有機環境部 生産環境研究G 宮永智悠

県内14圃場から採集したいもち病菌57菌株について、薬剤添加培地上で感受性検定を行った。アゾキシストロビン剤の実用成分濃度(100ppm)以上で菌糸伸長がみられた菌株は0菌株(0%)であった。

### イ ネギアザミウマの薬剤感受性検定 (国・県) (平成29年度)

有機環境部 生産環境研究G 笥美咲

県内5地点5圃場から採集したネギアザミウマについて、ソラマメ催芽種子浸漬法によって感受性検定を行った。スピネトラム水和剤、シペルメトリン乳剤は5地点中4地点において死虫率が80%以上であった。クロチアニジン水和剤は5地点中3地点において死虫率が60%以下であった。

### ウ 減農薬防除体系実証事業 (国・県) (平成28～30年度)

有機環境部 生産環境研究G 笥美咲

ラッキョウ圃場においてカキ殻石灰200kg/10a施用区では、無処理区より土壤中ネダニ数が抑制された。また、SPAD値は定植後57日において、地際部の茎の太さは定植後68日において有意に高かった。オニオンパウダーを用いたトラップはネダニの誘引を確認したが、防カビ剤(市販薬剤2剤、オルトフェニルフェノール、イマザリル)を噴霧したものは誘引効果が低下した。

## (4) 重要病害虫等侵入警戒調査事業 (国・県) 平成26年～

病害虫防除室

### ア チチュウカイミバエ

福井市、あわら市、勝山市、越前市、若狭町の5ヶ所に誘引トラップを設置し、5月～10月に調査を行った。調査期間中にチチュウカイミバエの誘殺は認められなかった。

### イ スイカ果実汚斑細菌病

平成29年7月6日に2ヶ所のスイカ圃場において目視で症状の有無を調査した結果、本病は確認されなかった。

### ウ ウメ輪紋ウイルス

平成29年6月5～7日に、10園地のウメについて目視で症状の有無を調査するとともに、採取した試料を検査した結果、本病は確認されなかった。

### エ キウイフルーツかいよう病 (Psa3系統)

平成29年6月28日に福井市寮町のキウイフルーツ栽培圃場1圃場において目視で症状の有無を確認した結果、本病は確認さ

れなかった。

#### (5) 土壤保全対策費（土壤環境基礎調査事業）（S54～）

有機環境部 有機農業研究G 齊藤正志・坪内 均

土壤機能実態モニタリング調査事業：農地25地点の土壤の断面調査および化学性の分析を実施し、土壤診断および土づくり対策指針作成を行った。基準点調査事業：場内水田圃場に化学肥料単用区、無窒素区、有機物施用区、総合改善区を設けてあきさかりを栽培し、稲わらの連用が土壤と水稻の生育に及ぼす影響を調査した。また、畑ライシメーターでスイートコーンとダイコンを栽培し、牛ふん堆肥、汚泥肥料の肥料代替効果を検討した。

さらに、農地土壤炭素貯留等基礎調査事業として農地10地点および場内基準点調査水田圃場（化学肥料単用区、総合改善区）の0～30cmの土壤炭素貯留量を調査した。

#### (6) 肥料検査登録事業（S51～）

有機環境部 有機農業研究G 坪内 均

肥料取締法（昭和25年法律第127号）に基づき、特殊肥料2点について、収去および成分分析を実施した。

#### (7) 奨励品種決定調査事業（S39～）

○水稻

ポストコシヒカリ開発部 両角悠作

本年度は本県に適する早生多収系統および業務用米向け多収系統の有望系統選定を主な目標として、予備調査に11系統を供試した。結果として、3つの有望系統を得た。早生系統では「越南294号」が有望であった。「ハナエチゼン」と比べて、出穂期は同等で、収量は115%と多収であった。さらに、品質も良質であり、食味官能試験の結果も「ハナエチゼン」並であった。業務用米向け系統の選定では「北陸274号」が有望であった。出穂期は「日本晴」より3日早く、収量比が114%と多収であった。さらに、品質も日本晴並であり、食味官能試験の結果、粘りすぎず、硬さも有り業務用米適性が高く有望であった。また、中生系統では「越南258号」が有望であった。「コシヒカリ」と比べ、出穂期は同等で、収量が112%と多収であった。また、「コシヒカリ」と同程度の良食味であり、千粒重も大きく大粒であった。

○大麦、大豆

作物部 高橋正樹・奥村華子

大麦は、平成27年度（平成28年産）より、糯大麦の品種選定を優先して調査している。平成27年度（平成28年産）は記録的暖冬だったが、数系統の糯大麦について、大麦標準施肥栽培に加えて実肥施用栽培を設けた調査の結果、四国裸糯129号および北陸皮糯58号を有望とした。このうち、北陸皮糯58号について、平成28年度（平成29年産）の試験では、播種時期および実肥施用の処理を設け、子実β-グルカン含量を高める栽培技術を調査しているほか、現地2か所（福井市および大野市）で、実肥処理による高β-グルカン化栽培試験を実施している。

小麦は、超強力多収品種「こしちから（東北225号）」を有望とし、平成28年度（平成29年産）の試験では、省力的な子実高タンパク化栽培技術について、場内および現地1地点で調査している。

大豆は、基本調査8系統と予備調査12系統を、5月24日および6月9日播種で検討し、昨年度同様東山238号（昨年の東山系c637）を有望とした。

#### (8) 原原種・原種ほ設置事業（S38～）

作物部 作物G 見延敏幸

水稻・大麦・大豆の系統維持および原原種生産のために採種を行った。水稻はコシヒカリなど13品種の原種や系統を栽培し、原種13,827kg、原原種300.4kgを生産した。大麦はファイバースノウの原原種や原・原々種を栽培し、原原種200kg、原・

原々種20kgを生産した。大豆は里のほほえみなど2品種の原原種や原・原々種を栽培し、原原種349kg（大粒・手選別前）、エンレイの原・原々種7kgを生産した。

#### (9) 優良種子生産体制確立 (S38～)

作物部 作物G 見延敏幸

水稻・大麦・大豆の優良種子生産に向けて、水稻においては原種、大麦・大豆においては原原種の発芽率を調査した。水稻原種では発芽勢（51～91%）、発芽率（96～99%）、大麦原原種は発芽率（96%）、大豆原原種は発芽率（95%）であり、いずれも、福井県での種子審査基準と農産物検査での種子基準を満たしていた。

#### (10) 中山間地向け果樹苗木育成供給事業 (H27～)

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 猿橋由恵

獣害を受けにくい果樹を植栽することで中山間水田の荒廃防止対策につなげるため、園芸研究センター内で果樹苗木を3年間養成し、希望する農家へ配布する。平成27年度導入のクルミ100本、カリン100本、ナツメ200本、渋柿200本、ユズ200本と平成28年度導入のクルミ300本、渋柿100本の苗木を育成し、新たに渋柿100本、ユズ300本を導入して育成を開始した。

#### (11) 水稻生育指標調査(S45～)

作物部 作物G 笈田豊彦

5月2日移植のハナエチゼン、コシヒカリ、あきさかり、日本晴および5月19日移植のコシヒカリ、あきさかり、いちほまれについて、生育・収量・品質の本年の気象に対する反応を追跡した。6月の低音で葉齢・葉色・草丈は抑制されたが、分けつは留まらず、最高茎数は多かった。7月の高温で幼穂形成期から出穂期までの期間が短くなった。また草丈も生育後半で伸び、コシヒカリは倒伏した。穂数は多かったが登熟歩合は落ち込んで収量は平年並みとなった。玄米タンパク質含有率は昨年並みに低かった。

#### (12) 伝統地場農産物等原種供給事業 (県) (平成14年度～)

園芸研究センター 花き研究G 早川 嘉孝

山内カブラ、古田カブラ（選抜4年目）、杉箸アカカンバ（選抜3年目）の種子を現地に供給した。供給した種子の品質の確認をするための現地調査を行なった。山内カブラはおおよそ2系統に選抜されている。古田カブラの70%のカブは本来のカブの特徴である偏平なものになっている。現地の強い要請でさらに1年、選抜の精度を高めるために形質の揃ったカブを現地から持ち帰り、隔離した圃場に定植し選抜を進める。昨年、採種した吉川ナスの種子の栽培調査を行った。栽培した全てのナスは吉川ナス本来の特徴を備えた株であった。昨年度採種した種子の混種、交雑は無いものと判断される。

#### (13) 試験研究課題化・評価システム事業(経営調査) (県) (平成25年度～)

企画・指導部 経営研究G 林恒夫、山本多代

いちほまれの労働時間、生産費について

県内の5経営体を対象に、いちほまれの労働時間（育苗と乾燥を除く）と生産費を調査した。5経営体の内訳は、特別栽培①、②が2、特別栽培④が2（うち直播栽培1）、エコファーマー栽培が1である。農薬を施用しない特別栽培①、②の労働時間は20数時間/10a、生産費は13～17万円/10aであった。エコファーマー米、特別栽培④は労働時間10時間/10a程度、生産費は17～20万円/10aで、直播は約7時間/10a、11万円/10aであった。販売価格が生産費を上回ったのは、特別栽培①のみで、30kg/10a増の単収増が必要と思われた。

### 3. 普及指導業務実績

#### (1) 県全域の普及指導活動の支援（館 一校）

##### ① 普及指導計画の進捗状況および評価への助言

平成 29 年度は「攻めの農林水産業」への農業施策が展開される中、「ふくいの農業基本計画」に基づき、収益性の高い農業経営と活力のある農村の実現を目指して普及指導活動を実施した。いちほまれの平成 30 年からの本格的な普及拡大、里山里海湖ビジネスの展開、GAP の推進等を図るため、次年度普及指導計画への意見・改善・要望を県庁関係各課や農業経営支援部課からいただき「平成 30 年度福井県普及指導活動方針」および「平成 30 年度普及指導計画作成・進行管理・評価等要領」の策定と推進にあたった。

また、特徴ある農業経営支援部課の普及活動が行われるよう普及指導計画中間検討会、実績検討会、次年度普及指導計画検討会を通し助言にあたった。

調査研究については、全ての普及指導員が普及指導計画に基づき取り組むことから、高度営農支援課では計画作成から実績取りまとめまで技術的アドバイスを行った。

3 月 14 日（水）、国際会館において普及指導活動外部評価（普及活動事例研究会）を開催し、農業経営支援部課から 6 課題発表し、株式会社フレックスコンサルティング永田寛明氏他 3 名の委員から評価を受けた。

##### ② 普及指導員の資質向上

普及指導活動で直面する課題解決を図るため、普及指導員の資質向上と普及活動の効率化をねらいとして、第 1 回普及指導員研修会を 6 月 2 日（金）にふくい農業ビジネスセンターで「農業経営改善のポイントについて」農研機構中央農業研究センター農業経営研究領域松本浩一氏から講演をしていただいた。また、平成 28 年度に農業経営塾を受講した農事組合法人陶部グリーンファームの代議員西森茂氏から、目標達成に向けた経営計画づくりについて経営改善実践事例を紹介していただいた。さらに、平成 30 年以降の米政策について収入保険制度を中心に北陸農政局福井支局長田中直幸氏に、農政情報を報告していただいた。

11 月 17 日（金）には、福井県生活学習館で第 2 回普及指導員研修会を開催した。この研修会の目的は、普及指導員の世代交代が進む中、儲かる農業経営者の確保・育成するために、収益性の高い福井県農業経営の実現のためには、若手普及指導員の指導力向上が求められているため、若手普及指導員を対象に研修会を実施した。

まず、「トヨタと連携した農業法人の経営改善に向けた普及指導活動」と題して、石川県農業試験場中央普及支援センターの東ち親子氏と島田翔平氏からトヨタのノウハウを活用した現場改善による生産性向上について講演をしていただいた。

次に、担い手農業経営者の育成について、普及としてどう取り組むのか 3 グループ（新規就農者、個人認定農業者、集落営農組織）に分かれ、ワークショップ形式で討議した。

さらに、1 月 26 日（金）富山県パレブラン高志会館で北陸ブロック現地活動調査研究会が開催された。この調査研究会は北陸 4 県の先進的な普及活動の成果について相互に交換し、その手法を研究することで、普及指導員の資質向上ならびに効率的・効果的な普及活動の展開を図るために毎年行われており、本県からは 11 名の普及指導員が参加した。

この中で、「GAP 導入による生産管理体制の構築について」と題して株式会社富山環境整備 アグリ事業部生産課 課長岩田豊英氏の基調講演の後、北陸 4 県から普及活動事例が発表され、本県からは福井農林総合事務所農業経営支援部の下野貴美子氏が「新規就農者と共に切り拓く露地野菜産地」と題して、発表した。

また、普及手法の研修として、第 5 回農業普及活動高度化発表会（9 月 21～22 日）へ 6 名、第 5 回農業普及活動高度化全国研究大会（11 月 21～22 日）へ 8 名の普及指導員を派遣した。同会では、嶺南振興局農業経営支援部主任田安拓馬主任が「儲かる施設野菜法人の育成」と題し発表し、農林水産省生産局長賞を受賞した。

普及組織等への新規採用者に対して、新任者研修（5 月 11 日～19 日、6 月 16 日）を実施し、本県の農業の現状と課題について専門ごとの講習に加え、現場に出向き課題解決に取り組んでいる経営体と直接意見交換を行い普及指導活動の基礎を

研修するとともに、農試、園試、畜試へ4日間の農業体験研修を実施した。

農林水産省派遣研修には25名、農業経営・産地育成指導力強化研修には6名を参加させ、県内でも各専門別研修を開催した。これら研修の中で、特に農業経営や産地育成にかかる実践力を養成する研修を重点に実施した。

普及指導員受験対象者に対し、資格取得を目指して研修会（6月14日、3月16日）を開催し、業績報告書および課題イ・ウを中心に添削指導を実施した。その結果、5名の受験者が合格した。

## (2) いちほまれ栽培技術の確立と普及（山口 泰弘）

### ①栽培マニュアルに基づく生産指導

今年いちほまれが試験生産、試験販売された。生産者、指導員ともに初めて栽培を行うため、栽培マニュアルに基づき、生育に応じた指導を行った。4/10に生産者、指導員を集めた栽培研修会を開き、200名が出席した。また、栽培指導者を集めて5/2に育苗研修、6/15に中干しおよび追肥の研修、7/10に葉色診断による穂肥の研修を行った。また、いちほまれの生育状況、栽培管理、水分状況、適期刈取り情報を掲載した「いちほまれ情報」を6/2～9/15にかけて、合計12回生産者に向けて発信して生産指導を行った。

### ②栽培技術開発

エコファーマー用一括肥料等を選定するために、展示圃等を合計30ヶ所設置して、慣行肥料と比較検討した。結果として移植特栽④用の一括肥料は選定できた。しかし、収量等の結果が悪かったため、エコファーマー用移植、直播の一括肥料の選定ができなかった。この他に肥料の投入量の検討を現地6ヶ所で、適正移植時期、特栽分施方法、刈取り診断方法等の検証を農業試験場で行い、試験結果元にマニュアル改訂を行った。

### ③特A評価定着のための基本技術指導

毎年秋落ち現象等により外観品質が悪い嶺南地域において、地域に適した肥料を選定する必要がある。このため、新たな肥料3品目を9生産者の圃場で比較検討した。今年は気象の影響により嶺南地域特有の秋落ち現象が見られなかったため、肥料による外観品質改善効果は判然としなかった。

福井米の品質向上を目的に毎年、稲作情報とe農メールの配信を行っている。今年は台風接近に伴う対策等が加わり、合計27回情報を発信した。

## (3) 優良小麦品種の生産技術および需要の拡大（山口 泰弘、館 一枝）

### ①穂肥施用技術の確立

石灰窒素および小麦専用一括肥料を用いた穂肥施用の省力化を目的に実証圃をJA福井市およびJA永平寺管内に6ヶ所設置した。タンパクを向上させるために一括肥料の被覆肥料の溶出を遅らせた「小麦専用一括肥料」は麦が肥料成分を吸収する量が低く、低収となった。一方石灰窒素区では収量、タンパク向上効果が確認できた。また来年行う試験設計について8/30に事務所担当者と検討し、11月に穂肥省略実証圃をJA福井市およびJA永平寺管内に6ヶ所設置した。

### ②県大3号小麦を使用したソフト麺等の使用拡大

4/17～28にH28年度県大3号を使用した商品の求評会出席者にサンプル作成の有無と使用量調査を実施し、5/15にサンプルを配布した。12事業者が合計233kgのサンプルを使用したいと回答し、試作品は学校給食会がソフト麺とパン、飲食店はパンケーキ、ニョッキ、パスタ、ピザ、うどん、パン屋からはバンズやパン生地、シフォンケーキ、スコーン等であった。6/20に県大3号小麦のタンパク質分析を金沢製粉に依頼した結果、タンパク質には地域性があった。また、グルテンの質に差はなかった。9/12にソフト麺の作成を（有）吉川製麺に、10/13に（株）ヤマサ製麺および日福製麺（株）に依頼し、永平寺町内

および福井市内の学校給食に出し、児童、生徒、先生から好評を得た。12/14に学校給食用パンの試作を鎌田製パンに依頼し、学校給食会と県大3号導入に向けた検討を行った結果、食味が良いと好評で2月から県内学校給食で試験的に導入することとなった。

#### (5) 水田園芸の定着に向けた省力・安定生産技術の確立 (田中 寿実子)

園芸を取り入れた複合経営を確立するため、露地品目ではネギと契約キャベツについて、技術解決チームを軸として、①共通試験の実施による生産性向上・コスト削減の検討、②経営収支の把握により、指導者がレベルアップを図れるように活動を行った。また、作付推進や栽培指導においてJA等の関係機関と連携を図るため、JA営農指導員を対象とした園芸専門指導員養成講習の支援も行った。

##### ① 契約キャベツの大規模経営の確立

契約キャベツ技術解決チーム会 (8回開催：5/23, 6/26, 7/18, 8/22, 9/26, 10/18, 1/19, 3/2)

3年目の取り組みとなり、栽培面積は拡大している。しかし、気象等の影響を受け、目標収量に到達していない。まずは、統一的な指導を行えるよう情報共有し、異常気象により栽培に問題が発生した場合はリアルタイムで対応した。また、収益性を高めるために、大玉化、生産コストの削減のために共通試験を実施した。また、重点対象経営体の経営収支の把握をし、所得向上に向けて検討した。

##### ア 栽培マニュアルの完成

- ・統一的な指導を行えるように、「契約キャベツ栽培マニュアル」を作成・配布した。各地区の栽培研修会等の指導にて活され、統一した基本技術を普及することができた。

##### イ 低コスト化に向けた施肥体系の検討

- ・昨年の経営収支から見てもコスト削減は必要である。肥料代、追肥回数を減らし人件費の削減に向けて、経済連、肥料メーカーと一括肥料の開発を検討した結果、昨年に引き続き4資材に加えて新規1資材の提示があり、チーム会に肥料試験を提案した。
- ・肥料試験を7か所(福井2, 坂井1, 奥越2, 丹南1, 二州1)で実施することになり、統一調査マニュアル提示し、それに沿って調査され検討した。その結果、収量、コスト面から、品種別に基準肥料を決定することができた。

〔おきな(早生)：ユートップ20号(奥越はみどり名人・旬菜職人)  
YR万代(晩生)：ユートップ30号(奥越はみどり名人)〕

##### ウ 現地における課題解決に向けた実証・指導

##### (ア) 育苗

苗立率を向上させるため、肥料メーカーから育苗資材の提供を受け、チーム会で実証圃を提案し、4か所(福井, 奥越, 丹南, 二州)で、育苗時に覆土する資材(多孔質ケイ酸カルシウム)の実証を行った。その結果、苗はしっかりした仕上がりで、健苗育成に有効であった。次年度導入を希望する生産者もあり、チームとしても推奨することとなった。

##### (イ) 病害対策(品種比較)

昨年に引き続いて、根こぶ病抵抗性品種「YCR こんごう」の試験を3か所(福井1, 坂井2)で行った。種苗メーカーとともに圃場巡回し、生育状況を確認。根こぶ病の発生はなく、品質良好で実需者からの反応もよかった。今年度は、各地区で根こぶ病が発生しており、有効な対策として次年度から導入することとした。

## エ 大規模経営モデルの指標作成

データ収集対象経営体は18経営体(福井6, 坂井6, 奥越1, 丹南2, 二州1, 若狭2)と定め、それぞれの生産・販売・経営データを収集した。労働時間や経営収支について分析し、大規模 経営モデル指標を作成した。

## オ 重点経営体に対する指導促進

### (ア) 指導機関の連携強化

- ・経済連、生産振興課と販売方針の確認、JAとの推進体制について検討した。昨年度実需者との契約数量を出荷できなかったこともあり、今年度は契約数量を確保する活動を強化することとなった。経済連が買い取り時に契約数量を守った生産者に対して単価を上乗せする「ランク別精算方式」を実施した。
- ・各地区からの生産情報を吸い上げて出荷計画に反映させるため、月に1回JA、経済連、普及指導員を召集した担当者会議を提案し、実施することになった。

### (イ) 技術解決チームにおける課題・対応策の共有

- ・チーム会で今年の指導方針を確認し、各地区の作付計画(品種、作業工程)を検討した(5/23)。指導方針に基づいて、チーム員がJAや生産者と作付計画を再検討し、品種や段付け計画が作成された。
- ・経営体別に生産データ(作業工程)を検討し(6/26)、進捗状況を確認した(8/22, 9/26)。概ね計画された作業工程どおりに、作業が進められた。
- ・台風5号、8月下旬の多雨による肥料溶脱で葉色が淡く小玉に生育が経過していたため、追肥実施、病害の発生予防の徹底を目的として、急遽普及員と圃場巡回を行った(9/8・11・13・20・25)。生育が小玉傾向だった圃場では、早急に追肥が実施され、生育は回復した。
- ・台風21号による冠水、浸水圃場が多く、病害と出荷後のクレームが発生した。特に、結球後期の圃場で被害が多発した。圃場ごとに排水対策の有無、被害状況についてとりまとめ、検討した(1/19)。大体の地区では、表面排水対策は行われていた。しかし、急激な降雨になると、圃場より高い排水路等から逆流するなど圃場内の排水対策だけでは限界がある。現時点では、浸水、冠水しない圃場の選定を重点的に指導することを確認した。
- ・今年度の生育のとりまとめおよび課題について検討し、課題が明確となった。次年度の改善策として、①栽培基本技術(圃場選定・育苗・除草)の徹底、②大規模化に向けた機械化一貫体系の確立、③新規品目等との組み合わせによる新たな園芸作付体系の検討を行う。

○ 平成29年度実績 作付面積：50ha(前年44ha) 出荷量：780t(前年711t)

## ② ネギの収量・品質向上に向けた支援

### ネギ技術解決チーム (3回開催：6/23, 9/12, 1/10)

生産が拡大するに伴って、市場からは年間を通じた供給を要望されている。そのため、作期拡大に向けて、水稻作業と競合しない、単価が安定している、栽培に手間がかかりすぎない作型として、初夏どりを検討した。

### ア 作期拡大に向けた本県に適した初夏どり(大苗育苗)技術の検討

- ・昨年に引き続き、チーム会で初夏どりを目的とした大苗育苗の実証圃(福井、奥越、坂井)を設定した。
- ・各地区の実証圃の生育・収穫調査の結果について検討した(1/10)。その結果、7/15前後の収穫開始によって、慣行の2割高い収益を得られる有望な作型と確認できた。また、栽培では、土寄せ等の管理には柔軟に対応することが必要であり、推進対象として雇用型経営、長期出荷志向の小規模農家と考えられ、進めていく。

### イ さび病の発生予測をもとにした防除体系の検討

- ・チーム会において、農試生産環境Gからさび病の発生予測情報を提供してもらった。各地区の発生状況と照らし合わせた

が、今年はさび病の発生がほぼなく、発生予測の精度を確認できなかった。しかし、前年の発生状況と予測を照らし合わせると、精度はあると思われるという反応であった。

- ・農試生産環境 G が「指導活用技術手引き」にて、総合的な病害虫防除体系としてとりまとめ、今後現場で活用する予定である。

#### ウ 既存生産者等を中心としたネギの規模拡大推進

- ・農林水産支援センターの研修で、講師(富山県の全農職員)を選定し開催した(9/12)。参加した生産者からは、規模拡大に向けた活発な意見が出ていた。
- ・近県の栽培技術を改めて聞く機会となり、チーム員からも今後技術を見直すために参考になったという反応が多かった。
  - 平成 29 年度実績 作付面積：98.3ha(前年 94ha)

#### ③ 園芸導入に向けた試算指標の見直し

- ・「今月の農業」技術検討会議において、趣旨説明をし、普及員への調査協力を依頼した(4/21, 7/21, 9/26)。普及員からは、経営指導で正確な指標が必要という反応が多く、見直しについて合意を得られた。
- ・調査は、29 品目・43 作型で行い、事務所から提出された調査票をもとに、データを集計して、園芸作物耕種基準《経営編》を改訂して配布した。

#### ④ J A 園芸専門指導員の養成支援

- ・ J A 園芸専門指導員養成講習会に営農指導員 15 名(9 J A)が受講し、水田園芸(ネギ・キャベツ)の生理生態、栽培方法、病虫害防除について説明を行った。
- ・普及指導員と連携しながら現地指導する必要性を説明した。同じ視点で栽培指導できるように、普及指導員と同様に、指導対象農家を対象とした生産・販売・経営データを収集することを説明し、発表する機会を設けた。

### (6) ミディトマトを中心とした大規模施設園芸の経営確立(田中 寿実子)

平成 25 年度から、50 a 規模のミディトマトや大玉トマト等を生産する大規模施設園芸が嶺南地区を中心に行われており、他地区に波及している。環境制御技術を駆使した長期どり栽培がミディトマトで行われているが、圃場によって生育が異なり、生育診断の指標がないため、普及、園芸研究センターと連携して、統一的な生育調査によるデータ収集・分析を調査研究として取り組んだ。また、技術解決チーム会を通して、栽培指導を担当する普及指導員が情報交換を行うとともに、栽培技術の向上を図るため、定期的な圃場巡回・検討会を実施した。

#### ① 大規模施設におけるミディトマト栽培の確立支援

大規模園芸(トマト)技術解決チーム (8 回開催：4/27, 5/30, 7/27, 8/24, 9/6, 10/31, 12/13, 3/12)

##### ア 長期どりミディトマトにおける生育診断の指標および高収量草勢モデルの作成

- ・H28 年定植分の収穫終了後の最終草姿を普及指導員と調査を行った(高浜 6/27, 坂井 6/28, 小浜 7/3, 福井 7/6)。調査結果をチーム会にて還元し、草勢と施肥管理の関連性を考える機会にした。
- ・普及指導員(若狭)、園研センターの担当者 28 年定植分の生育調査結果について分析した(8/24)。その結果、相関性があると判明した調査項目に絞り込んで、H29 年定植分の生育調査から変更を行った。
- ・打合せ結果をもとに、調査マニュアル、調査様式を見直し、チーム会にて提示した(9/6)。29 年定植分は、栽培全圃場(ミディトマト 6 か所、大玉トマト 2 か所)で統一的な調査を行い、データを収集した。
- ・各地区の生育調査結果をもとに、リアルタイムで判断できる生育指標の設定について検討を行った(10/31, 12/13, 3/12)。次年度から、生育指標として、茎径(茎頂から 15 cm 下)と茎頂から最上位花房の長さを使用し、数値を設定して活用するこ

とで合意した(3/12)。

#### イ 各経営体の施設、装置の整備状況のとりまとめ

- ・今後普及拡大を進めるために、現在稼働している施設で導入されている栽培システムや環境制御装置等のとりまとめを提案した(5/30)。合意が得られたため、様式を提示しとりまとめ、チーム員に還元した。

#### ウ 新規取組経営体における基本技術習得の支援

- ・今年度から稼働開始した大玉トマト栽培経営体の栽培指導会に出席し、関係機関と生産者が定期的に検討することにより、環境データを活用した栽培指導が行えた。(7/13, 9/7, 10/2, 11/16) ミディトマトの生産振興

### ② スペシャルミディの情報発信支援

#### ア 越のルビー振興委員会を通じた周知促進

- ・経済連、生産振興課、園研センターと園芸年間スケジュールを打合せし(4/11)、越のルビー振興委員会を通じて情報発信をすることを確認した。
- ・経済連、生産振興課、園研センター、主要 JA とブランド強化に向けた選果方法等について検討し、新品種に関する情報を提供した(12/8)。生産サイドだけでなく、販売サイドとも情報を共有することができた。

#### イ 新品種の評価、現地での栽培実証

- ・園研センターとスペシャルミディに関する進捗状況、今後のスケジュールを打合せた(5/11)。その結果、現地に出すために同じ様式(スプレイポニック、ロックウール)での栽培が必要と認識され、園研センターで9月から栽培実証を行った。また、品種は7品種(赤4, 橙2, 黄1)を基本にして、絞り込まれた。
- ・食味検討会にて、各新品種の特性を確認したところ、糖度が高い品種があり、参加者からの反応はよかった。(12/4)。
- ・大規模生産者、担当普及員等を対象に圃場見学会を開催したところ、生産者は糖度が高い品種に関心があり、今後現地実証をすすめていく。(1/17)。

## (7) 広域推進主要果樹の生産拡大とブランド力強化(三輪直邦)

### ① 果樹指導体制の強化と研究成果の普及

#### ア 普及と研究の連携

4月20日、平成29年度の実用化技術等の今後の普及方法等について、普及指導員と研究員による検討会を開催した。技術内容、普及対象者、普及時期等について意見を出し合い、具体的な普及方法を検討した。

園芸研究センターの「モモ・スモモの有望品種の選定」が平成30年度の実用化技術としてまとめられることから、早期普及を目的として、嶺北・嶺南それぞれで直売所出荷者等を対象にした研修会を開催した(7月31日園芸研究センター、8月7日JA春江本店)。

#### イ 指導体制の強化

若手研究員等の果樹栽培技術・知識の向上を図るため、「今月の農業果樹部会」開催時に、最新の果樹トピックや技術を学ぶ研修会を開催した(計6回)。毎回、決められたテーマについて若手研究員等が資料を作成して発表することで、理解促進の効果を高めた。合わせて主要果樹(ウメ、ナシ、カキ、ブドウ)や新規果樹(モモ、スモモ)の技術研修会を開催し、時期別の基本技術の習得を図った。また、現地巡回や生産者との情報交換会を通して、現地の現状・課題の把握に努めた。

## ②ブドウ品質向上によるブランド力強化

### ア ブドウ生産技術の向上

5月2～9日に各地区で「ふくぶる春の講習会」を開催し、コンパクトな房づくり（軸長7cm）、品質向上のためのハウス換気、新梢管理等の徹底を呼びかけた。29年度の重点推進事項である果穂長統一（穂軸スケールの活用）については、収穫1か月前の6月下旬から個別巡回指導を実施し、早期からの管理徹底を図った。

出荷目揃い会は、坂井地区では7月28日、その他の地区では7月下旬から随時開催した。せん定講習会は、坂井地区は11月1日、丹南地区が11月4日、二州・若狭地区では個別に巡回指導した。植え付けから5年程度が経過し成木となってきた園地が増えてきたため、若木の園地との生育差が広がってきた。講習会等を地区ごと・園地ごとで実施したことで多くの質問が出て、それぞれの問題点が明らかになり、各農家の技術習得が進んだ。

7月5～6日には、ブドウネットワーク会員27名の参加を得て、山梨県山梨市および甲州市で「シャインマスカット」の短梢せん定栽培を中心に新技術や経営事例を視察した。

1月19日にアオッサにおいて、ふくいブドウネットワークとふくい農林水産支援センターと共催で、ブドウ栽培技術向上研修会を開催した。長野県農政部の徳永聡副主任専門技術員からは、「シャインマスカットを中心とした栽培のポイントと省力化技術」と題して講義を受け、農業試験場高度営農支援課の三輪主任からは、29年度のブドウ栽培の実績と課題について発表があった。生産者からは、熱心な質問や意見が交わされ、技術習得等に有意義な研修会となった。

ネットワーク会員に配布している「ブドウ通信」は、第28～32号を発行し、会員紹介や各時期の栽培管理のポイント、ネットワークの活動状況等を掲載した。栽培管理の主要な時期や気象災害対策については、メールおよびSNSにより随時情報発信した。

### イ 「ふくぶる」のPR支援

平成26年に商標登録された「ふくぶる」による県産ブドウのPRのため、プレゼントキャンペーン企画を支援した。キャンペーンは、「ふくぶる」ブドウのパッケージに貼られたシールをアンケート付の専用用紙に貼って応募する形式とし、7月24日～8月20日の期間で行った。量販店や直売所には、プレゼント企画の周知と応募用紙やポスターの設置について協力を依頼し、無料情報誌においてもキャンペーン告知の掲載を依頼した。その結果、115名で計369口の応募があり、県産ブドウのPRと消費者の意見や感想が収集できた。

## ③ウメの多収性オリジナル品種の定着促進

### ア 福太夫の品質統一

実用化技術である熟期を揃える新梢管理技術の普及拡大を図るため、4月28日および5月2日に二州管内で研修会を開催した。6月12日の目揃い会等では、園芸研究センターが開発したカラーチャートを用いて果皮色を揃えた収穫を呼びかけ、加工に適する果実の集荷が増加した。

### イ 新平太夫の集荷体制の構築

需要が高まっている新平太夫の集荷増加を図るため、関係機関と集荷体制について検討を重ね、5月24日の出荷説明会および6月19日の目揃い会で手もぎと落果の両方を集荷することを周知した。12月15日の福井梅生産者大会では、新平太夫の完熟落果の「黄金の梅」の取り組み拡大を呼びかけた。

## (8) 既存花き生産組織の市場出荷誘導（坂本 浩）

### ①生産休止団体、市場出荷取りやめ団体の実情調査と再生産支援

#### ア 全生産組織の実情調査

4月下旬に経済連と連携して聞き取り調査を行い、15団体から回答を得た。約4割の団体がすでに市場出荷を行ってお

らず、多くの団体が課題として担い手不足を挙げており、すでに組織的な市場出荷が困難になっていることが窺がえた。

#### イ 新規農家共同育成の模索

4月25日の園芸カレッジ講座で、福井花卉出荷組合長の姉崎氏とともに花き生産農家への勧誘講話を行った。その中で生産者の圃場を見学するバスツアーを6月22日、7月20日の2回開催し、研修生3名参加、うち1名が花卉に興味を持ち、カレッジでストックを栽培し始めた。将来の花き農家就農に期待が持てる。

#### ウ 花卉担当普及指導員常駐外地域での研修会実施

農林漁業支援センターと連携して、7月7日に春江ユリーム、7月21日に敦賀市、10月15日に好評を受けて春江ユリームで講習、その他、総会等と併せて講習を福井市、あわら市で行った。

#### エ 生産組織のキク導入支援。

6月23日に旧清水町竹生生産組合でのキク導入を支援。作見、選り作業時間実測等で直接生産技術を指導した。

#### オ 生産情報の共有化

病虫害等の緊急特報を経済連園芸特産課を通じて、FAX等の資料を9回送付した。流通や花商関係者に本年度のキク生産情報を2回告知した。

#### カ 県内キク種苗業者の育成

7月21日、9月14日に福井シードの井村社長と協議。花卉種苗業者へ誘導を図った。10月25日に苗を10m×50mハウスに定植、次年度出荷に向けて育成を開始した。

### ②高齢化を見据えたキク減農薬栽培の実証

#### ア 農薬アンケートの実施

効果的な農薬選定のため、28年度、29年度のアンケート結果を集計し、感受性が低下していると思われる剤を次年度の予約購入リストから外した。

#### イ 農薬等資材の展示圃運営

ラーベインベイトA、ケイ酸カリ、サンクリスタル、ダニ剤9剤の感受性検定をチームで分担して行った(奥越、坂井、敦賀7か所)。各地域での農薬剤選定に活用した。

### ③直売・市場出荷農家対象の研修会実施による市場出荷誘導

#### ア 契約栽培への誘導と産地づくり

生産組織アンケートの集計結果を経済連とシェアし、危機意識を共有化した。5月19日に第1回打ち合わせ、6月20日に第2回打ち合わせ、9月21日に全JA、経済連を交えた次年度種苗生産説明実施。11月27日は福井花卉出荷組合勉強会、11月29日にはJAテラル越前キク部会で契約栽培概要説明。11/17北陸地域花卉研修会(あわら市:右写真)で北陸ブロックの生産者・関係者と花束づくり農家視察、12月15日には奥越地域キク栽培研修会で富山県元革新の飯村氏より契約栽培の講習を行った。

#### イ 福井市場と連携した市場出荷誘導

7月21日に二州キク栽培研修会を行い、福井市場横地社長と懇談、市場出荷コンセンサスを得た。7月27日、目揃え、市場出荷復活した。

### (9) 生産性の高い畜産経営支援（森永史昭）

貿易自由化の進展により輸入牛肉の増加など低価格帯牛肉の競争が激化している中、県補助事業等を活用し、乳用種・交雑種肥育農家等から若狭牛生産への転換意向農家や、高能力乳牛の導入を進めている酪農家等を中心に指導を行った。

また、H26年度に開発着手した「福井県の新しい卵肉兼用種の地鶏（福地鶏）」が完成し、平成29年4月から雛の供給が開始された事を受け、新規地鶏導入農家に対して指導を行った。

#### ①若狭牛・高能力乳牛の導入による生産性改善

##### ア 若狭牛転換農家等への技術支援

昨年度初めて和牛を導入し、ビタミンAコントロールの必要性等について指導を行ってきた二州管内の2経営体において、11月に肥育牛が初出荷された。出荷牛4頭は「三ツ星若狭牛3頭・若狭牛1頭」に認定され、新規経営転換農家の生産意欲向上につながった。

また、若狭牛を出荷している県内2戸の和牛肥育農家を重点農家とし、毎月1回、体重測定、導入素牛の除角、血中ビタミンA測定等による重点指導を行った。（4/27・28、5/23・29、6/23・30、7/20、8/18、9/26、11/28）

県では平成26年7月より「三ツ星若狭牛」（若狭牛基準に加えて、オレイン酸含有率が55%以上、牛にストレスの少ない飼養管理基準を遵守している等の条件を満たしたものを認証）の販売を開始している。しかし、オレイン酸含有率を向上させる手段については、まだ明らかになっていない。

そのため、H26～28年に畜産試験場で実施した「オレイン酸割合向上に関する試験結果」および「全国の和牛肥育試験における最新のオレイン酸割合向上に関する知見」について、研究員と普及指導員で情報共有を図り、農家への情報提供に努めた（7/28）。

さらに、毎月2回開催されている石川・福井合同肉牛枝肉販売会に出席し、畜産試験場と連携して枝肉中のオレイン酸含有率について測定を行うとともに枝肉成績のデータ収集および肥育農家との情報交換等を行った。

平成29年4月から30年2月までの出荷で、若狭牛の52%が三ツ星若狭牛として認定された。

##### イ 高能力乳牛導入農家等への技術支援

###### 酪農バーミティング研修会（4/26）

牧場内で「目の前の牛を見ながら飼養管理の状態を検討する」研修会の中では、農家からCa給与方法に関する質問が多く出され、関心が高かった。

搾乳衛生の状況を再点検するため、バルク乳検査結果に対応した個別巡回指導をJA・乳業メーカーと連携して行った（坂井・奥越・福井地区普及員と同行）（11/21・22）。

パイプライン洗浄対策として、簡易に管内温度をチェックできる、シール状のデジタルサーモテープを配布することにより、毎日の洗浄水温度管理に注意してもらうよう指導を行った。

#### ②「新地鶏」飼養管理技術の確立

##### ア 新地鶏導入農家の育成

地鶏の供給計画と農家受入については、畜産試験場が譲渡する前に、事前の連絡を各農林事務所・高度営農支援課に行い、できる限り関係者全員で雛の譲渡・鶏舎内環境調査を行うように努めた。（6/1、7/6・10・11・12・14、8/17、9/12・15、10/9・13・16、11/13、12/4・6・15）

初めての雛譲渡時には、普及指導員が①毎日の産卵状況記入野帳（4～3月）、②福地鶏飼育管理マニュアル等をセットにしたファイルを農家に渡し、毎日の飼養管理の状況を記帳してもらうように依頼した。

また、関係者全員で農家立ち合いを行うことにより、これまで普及があまり関わってこなかった地鶏飼育技術の統一に向けた現場での情報共有を図ることができた。

産卵率の安定と H30 年 5 月からの地鶏肉供給に向けて、餌は基本的に配合飼料（CP17%）を農家に推奨したが、農家が独自の餌を給与する場合は、農家の実情に合わせて、個別の飼料給与診断を行った。さらに、夏季飼養管理の注意点、「地鶏供給や農家調査で気づいた点」、「尻つつきの発生状況・飲水等の施設・破卵の処理（ウジ）」については、現地調査時に畜試職員と連携して指導を行った。

新規農家への地鶏普及活動にあたり、「パイプハウスを活用した玉村養鶏での取組み（5.4m×20m）」について現地調査を行った（9/22）。パイプハウスを活用しての安価な鶏舎は実用的であり、アライグマ等の中獣類対策として、地際のガルバリウム鋼板の設置は参考になった。当該農家は、JA福井市南部の園芸等の補助事業（20%補助）を活用し、直売所への卵出荷に繋げている。

産卵率については目標を 80%としていたが、農家別では 50～80%とバラツキがあった。地鶏は 13 戸の農家に譲渡されたが、H29 年 10 月以降、4 農家において悪癖（尻つつき）の発生が見られるようになった。

### ③今後の方向と課題

#### ア 若狭牛・高能力乳牛の導入による生産性改善

三ツ星若狭牛として認定されるには、枝肉中のオレイン酸含有率を 55%以上に高める必要がある。現時点では、その飼養管理手法が明らかになっていないため、引き続き関係機関が連携して検討を行っていく。

高品質な生乳を生産し、格差金等の支出を減らすことが経営改善には重要である。乳房炎は、原因となる病原菌を乳頭口から侵入させない衛生管理が大切であり、そのため、搾乳機器の定期的な分解洗浄や適切な搾乳手順の徹底を指導していく。さらに、農家からはタブー視されている「分娩前乳汁の性状を活用した乳房炎低減対策」など新たな取組みについても導入を検討する。

#### イ 「新地鶏」飼養管理技術の確立

平成 30 年度からは、卵に加えて福地鶏の肉が出荷開始される。そのため、畜試・各農林事務所と連携して、産卵率および地鶏認定率の向上に向けた、導入後の発育調査、飼養管理指導を実施する。

## （10）水田農業担い手の経営改善支援（渡辺和夫）

### ①地域農業の担い手育成に向けた課題解決

#### ア メガファーム育成手法の検討

チーム会で各地のメガファーム育成推進進捗状況の報告や経営研究グループから提供された集落営農における一般社団法人化の動きについての話題が提供された。また、農地中間管理事業の活用促進を図るため、担当者を招いて事業内容や実施状況についての情報を共有した。

#### イ 集落営農組織の経営改善手法の検討

集落営農組織等の経営評価指標項目を関係者と協議しながら策定し、各普及指導員が経営指導カルテを作成した。その結果のとりまとめから各担い手が抱えている経営課題や将来意向の傾向が把握できた。

さらに普及指導員が実践的な経営指導が行えるよう、経営指導力向上をねらいとした研修を 4 回実施した。

## ウ 農業経営体の個別指導の強化

各普及指導員が重点支援対象者を決めて、経営計画の策定支援を行ない、次年度からの「福井県農業経営相談所」開設に向けた準備を行なった。

### ②メガファーム育成に向けた最適な水田農業経営計画の作成支援

複合化経営に向けた経営指標の作成として、野菜チーム会・果樹チーム会・花きチーム会を通じて主要園芸品目の経営調査を実施した。また経営指標に基づく最適経営計画をシミュレーションする営農計画策定システムの活用研修会を実施した。

## (11) 6次産業の推進支援（館 一枝）

### ① 本年重点を置いた活動

県域の若手女性農業者の組織「ふくい農業女子会」が平成27年2月に28名で結成され、子どもたちへの食育や生産物・加工品の販売会を単発的に実施してきた。また、「ふくいアグリ女性起業ネットワーク」を組織し、情報交換会を実施してきた。しかし、各組織とも6次産業化への関心は高いが、施設整備等資金、情報、知識、技術が不足しているため、農林水産支援センター、6次産業化サポートセンター等と連携し、国や県の支援策の周知や女性農業者のネットワーク強化が求められている。

また、6次産業化を指導するにあたり、6次産業化の基本マニュアルの整備が必要である。これらのことから、以下の活動を展開した。

### ②活動の経過と成果

#### ア 6次産業化の取組み推進

##### ・関係機関と連携した研修会の開催

「ふくい農業女子会」と「ふくいアグリ女性起業ネットワークの会」の活動内容について「経営者としての自立を促す活動」と「女性の感覚を生かした・ふくいアグリ女性起業ネットワークの会（事務局：JA五連組合員トータルサポートセンター）の活動内容について、「経営者としての自立を促す活動」と「女性の感覚を生かした経営の維持、拡大に向けた支援活動」を行うことを合意し、6次産業化の支援策について紹介し、5/26には6次産業化等事業計画の書き方について説明し、12/5には商品開発研修会を実施。既存商品レベルアップと新商品開発時に考慮すべき事項について商品の味やパッケージ等デザイン、販売方法など参加者のプレゼンと質問に沿って指導した。また、居住地の市町の6次産業化の情報を知りたいということで、各農業経営支援部を紹介した。

##### ・女性農業者のネットワークの強化

女性農業者とつながる全国ネット「ひめこらぼ」の情報を会合の度に提供した。さらに、我が家の農業を他の農業者や消費者に伝えるプレゼンテーション能力を高める販売力向上研修会を5/26、11/28に実施した。

##### ・6次産業化の課題と支援策について調査研究の実施

ふくい農業女子会の会員を対象に①就農の動機・理由、②経営のスタイル、③役割分担、④経営上の苦勞、⑤農村生活で苦勞していること、⑥将来の抱負についてアンケート調査を実施した。結婚を機に就農し、経営は夫に共感、意向に沿って農業をしているが15人（44%）。経営のスタイルは、従事的に仕事をするが28人（82.4%）。役割分担では「農作業」を主に行っており、次いで「加工・体験」と「販売」である。経営上の苦勞では「育児・主婦業との両立」、「技術の未熟さ」、「資金の確保」、「所得が少ない」、「機械が女性向きでない」との意見があった。農村生活で苦勞している点では、「地域内に同世代の女性がない」、「近所づきあいが難しい、ムラ社会である」との意見があった。将来の抱負では、「6次産業化など消費者目線の商品を作りたい」、「地域の情報発信をしたい」、「儲けたい」との意見があった。今後は一人ひとりの現状を確認し、成功する具体的な課題や目標を設定するよう指導する。

#### イ 6次産業化に必要な基本マニュアルの整備

- ・既存マニュアルの修正、追加

HACCPや新規規格JAS等についても情報収集し、事業計画、営業許可、表示、HACCP等衛生管理などの項目を盛り込み、既存マニュアルの改訂を順にしていく。

#### ③今後の方向と課題

ア 消費者からは食品の安全安心が求められているが、県内の農林業者による6次産業化事業体には、HACCPや一般の衛生管理に準じた方式で製造している事業体が少ない。また、厚生労働省は平成30年通常国会に食品衛生法改正法案を提出予定である。また、農水省は2021年までにHACCPやそれに準ずる衛生管理をしている食品製造事業者を80%とする目標をあげている。しかし、県内の農林業者で県版HACCPを取得しているのは3事業体であり、衛生管理指導できる普及指導員も少ない。そのため、衛生管理の重要ポイントを指導できる普及指導員の能力向上が必要である。

イ 6次化に取り組む農業者や取組を希望する農業者は増えているが、機械導入にかかる資金や加工量と労働時間、販売価格、販売先など経営にかかる経営指標が不足しているので、産業化実践者の経営分析から指標を作成する必要がある。

## 4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

### (1) アグリチャレンジLABOクラブ

今年は、ふくい新ブランド米「いちほまれ」の場内外のイベントが行われ、広く県民の皆さんの興味関心をいただくことができた。アグリチャレンジLABOクラブの活動でも、より多くの皆さんに会場いただき、その様子がみられた。

4月19日に越南291号の名称が「いちほまれ」と発表されたことと、そして、「いちほまれ」の試食コーナーに幅広くの県民の皆さんが来場された。「いちほまれ」の試食コーナーには200名の方が列を作り、県民の関心の高さが現れていた。また、ペットボトル田植えやいちほまれの展示コーナーや生き物観察では、大人から未就学の子供たちに農業試験場に触れてもらい、親しみやすい試験場に触れる機会となった。また訪れた小中学生の中には、郷土新聞製作のテーマに「いちほまれ」を取り上げて来場された方も見られた。しかし、いちほまれの稲刈り体験は、台風の影響から実施することができなかった。申し込みをされた中には、職員の方の稲刈り作業を見学できないかというお問い合わせをいただいた親子もおられた。

場外のイベントでは、いちほまれを前面にPRする機会を得られ、県民と一緒に参加して会場を盛り上げるものとなり、県民の皆さんの気持ちを高めていくものであった。県内外の小中学校、高等学校および一般の方まで、「いちほまれ」の開発の経緯やおいしさの秘密について視察見学に来場された方がたくさんおられ、新品種の秘密を探究しようとする皆さんの関心が高かった。小中学校や高等学校の児童生徒さんは、夏休みの宿題のテーマとして取り組まれたり、高等学校の生徒は専門的な学習や地元の第1次産業を学習する機会として取り上げていただいた。県外からお越しいただいた方は、いちほまれの栽培について深く質問をされる方が多く、その回答に苦慮した。開発の中心にあったポストコシヒカリ開発部の皆さんは、首都圏などへのPRイベントや各種行事、マスメディアへの取材などに多数参加されていた。

今年は、イベントの回数が多く、そのチラシを広範囲の小学校や公民館に協力いただいて配布したこともあって、多くの方の参加型イベントでもあった。来年度は、来場者の方に農業試験場のことが伝わるような雰囲気の中で参加いただけるような企画を考え実施していきたい。

「農業試験場体験デー GW」 4月29日(土・祝) 10:00～15:00

【於：農業試験場】

No.	体験名	内容	場所・担当	対象・参加人数
1	新型炊飯器 ごはんの食べ比べ講座 ～究極においしいお米の炊き方～	炊き方のコツやコシヒカリの特性など職員が説明を行い、体験することでお米に対する興味や関心、理解を深めた。	農山漁家生活近代化センター ポストコシヒカリ開発部	一般～小学生 のべ300名
2	いちほまれの試食	いちほまれの試食 先着200名	本館北側駐車場キッチンカー ポストコシヒカリ開発部	
3	いちほまれ栽培技術ポイント講座	各部の展示、発表を通して、ポストこしひかりはじめとする研究について理解を深めた。	農山漁家生活近代化センター 高度富農支援課	
4	いちほまれの育成パネル展	各部の展示、発表を通して、ポストこしひかりはじめとする研究について理解を深めた。	農山漁家生活近代化センター 高度富農支援課	
5	田んぼの生き物観察 生き物にやさしい栽培について	水田周辺の生物を観察してもらうことで、水田やその周辺にいる生物の役割や生き物にやさしい栽培について理解を深めた。	農山漁家生活近代化センター 有機環境部	
6	ペットボトル田植え	イネを植えるコツやコシヒカリの特性など職員が説明を行い、体験してもらうことで農業について興味や関心、理解を深めた。	本館北側駐車場 作物部	
7	農業機械に乗って記念撮影 ボン菓子無料配布	いろいろな農業機械に触れて、記念撮影を行った。 来場者にボン菓子を無料配布	本館北側駐車場 作物部 企画・指導部	

「いちほまれ田植え体験会」 5月20日(土) 10:00～13:00

【於：農業試験場】

No.	体験名	内容	場所・担当	対象・参加人数
1	いちほまれ田植え体験会	ふくい新ブランド米 いちほまれ の名称決定を記念して、県民のみなさんに新品種を身近に感じていただき、関心を持っていただく。 37組のご家族より応募をいただき、五月晴れの下で元氣よく田植えを行った。	本試西側圃場 作物部中心とした各部協力	一般～小学生 37組130名

「いちほまれ観察会 夏 農業試験場体験デー」 7月29日(土) 10:00～15:00

【於：農業試験場】

No.	体験名	内容	場所・担当	対象・参加人数
1	夏休み自由研究応援企画 いちほまれとコシヒカリの身体計測	いちほまれの田植え体験会後のいちほまれとコシヒカリの成長の様子を田んぼで観察し、今の状況を確認する。	作物作業舎および圃場 作物部	一般～小学生 のべ200名
2	夏休み自由研究応援企画 田んぼの中をのぞいてみよう！	田んぼの周辺の生き物について、観察を行って、田んぼの生き物の状況について、興味関心を持ってもらう。そこから、生き物にやさしいイネ作りを学んだ。	本館2階小会議室 有機環境部	
3	今しかきけない開発者が教える いちほまれのココがスゴイ	ポストコシヒカリ開発部 富田部長より、いちほまれの開発のスタートからの逸話を聴き、これまでの状況を聴く。そして、いちほまれへの興味関心を持ってもらう。	大会議室 ポストコシヒカリ開発部	
4	今しかきけない開発者が教える こだわりのご飯の炊き方	いちほまれをおいしくいただくために、主婦の目線から炊飯の準備、炊飯後の状況などを解説した。	大会議室 ポストコシヒカリ開発部	
5	いちほまれの試食	いちほまれのおいしさを来場されたみなさんに、実際に味わっていただいた。そして、いちほまれへの親しみを持っていただいた。	乾燥舎 ポストコシヒカリ開発部 高度富農支援課ほか	
6	福太夫かき氷無料配布 先着200名 ボン菓子無料配布 先着200名	福井梅「福太夫」のシロップを使ったかき氷を無料配布 ボン菓子無料配布	本館北側駐車場 高度富農支援課	

「いちほまれ稲刈り体験会」 9月17日(日) 13:00～15:00

【於：農業試験場】

No.	体験名	内容	場所・担当	対象・参加人数
①	いちほまれ稲刈り体験会	台風18号のため中止となった。		

「コムラボコラボ」体験講座開催 10月8日(日) 13:30~16:00

【於：エンゼルランドふくい】

No.	体験名	内容	場所・担当	対象・参加人数
①	福井県児童科学館 エンゼルランドふくい コムラボ・コラボ あたらしいお米ができるまで～いちほまれの ひみつ～	福井県児童科学館の参加型科学実験教室のとして、出前講座を行った。親子でいちほまれの秘密やどのようにできるかを、町田主事による解説と体験で学ぶ教室であった。	福井県児童科学館 エンゼルランドふくい ポストコシヒカリ開発部	小学生親子25組

「場外イベント開催」

No.	イベント名	内容	開催日	参加人数	場所・担当
1	第23回全国花のまちづくり大会	県内外からイベントに来られた方、県民のみなさんに、いちほまれの育成過程についてパネル展を行った。また、いちほまれの試食も行った。	6月3日・4日	300	福井中央公園 場全体
2	JA担い手イベント	JA担い手イベント	11月8日	多数	福井県産業会館 企画指導部
3	ふくい味の祭典への出展	ふくい味の週間のイベントとして、いちほまれの開発経緯等について、出展	11月11日・12日	500	福井県産業会館 企画指導部

「県外視察」

No.	視察者	内容	視察日	参加人数	場所・担当
1	滋賀県稲作経営者会議栽培技術部会研修会	滋賀県の稲作担い手農家の米の栽培技術に関する研鑽活動として、本試の 坂田主任研究員に食味向上評価のための指標と栽培技術についてお話を伺い たいとのこと。	12月18日	-	彦根市勤労福祉会館 作物部
2	千葉県長生村農業委員会 酒井利方様 ハウネンワセといちほまれについて 視察	越南14号(ハウネンワセ)の栽培特性やいちほまれについて、視察。 ポストコシヒカリ開発部 富田部長	12月25日	1	場内 ポストコシヒカリ開発 部
3	新丸ビル シェフご一行様 視察	新丸ビルに店舗を構える料理人のみなさんが、福井の食材紹介の1つとし て来場した。いちほまれの展示室見学といちほまれの試食などを行った。 ポストコシヒカリ開発部 富田 桂 部長 町田 芳恵 主事	1月18日	9	場内 ポストコシヒカリ開発 部
4	新潟県農業総合研究所 視察 新潟県農業総合研究所作物研究センター 育種科原種生産管理チーム 主任研究員 福嶋朗山	いちほまれの開発経緯、食味調査、原種生産などについて、視察の依頼が あった。天候が悪化したため、来場できず中止となった。 ポストコシヒカリ開発部 富田 桂 部長 町田芳恵 主事	1月23日	天候悪化に より中止	場内 ポストコシヒカリ開発 部 作物部原種センター
5	御殿場市農作業受託組合 視察	米の受託している団体。コシヒカリ発祥の地とも言われている福井県で、 コメに関して話を伺いたいとのことであった。 ①積雪前の除草剤散布で斑点米が激減する取り組みについて 有機環境部 高岡 誠一主任研究員 ②福井米の品質向・食味向上の取り組みについて	1月31日	25	場内 有機環境部 作物部 ポストコシヒカリ開発 部
6	和歌山県伊都振興局農林水産振興部紹介 天野土地改良区 山本氏	福井県の水稲の栽培状況や特徴、取り組み、そしていちほまれの品種開発 の経緯について、お話を伺いたい。 ポストコシヒカリ開発部 富田 桂部長 作物部 徳堂康裕 部長	3月15日	15	場内 ポストコシヒカリ開発 部 作物部

「高等学校 出前授業講座など」

No.	授業名	内容	授業日	参加人数	場所・担当
1	啓新高校 インターンシップ 3日間	※作物部 1名 水稲生育調査補助、圃場管理	7月24日～26日	1	場内 作物部
2	福井県立藤島高校2年生 総合的な学習の時間のCM作成	高校2年生の総合的な学習の時間の取り組みとして、いちほまれについてテーマを設定した生徒4名が来場。ポストコシヒカリ開発部 富田部長より講義を受け、食味体験を行った。	9月7日	4	場内 ポストコシヒカリ開発部
3	仁愛女子高校出前授業	グローバルサイエンスコース2年生の食と文化という授業の1つとして依頼を受ける。福井県のお米の食文化について学習したところで、	11月18日	40	仁愛女子高校 ポストコシヒカリ開発部
4	福井農林高等学校生物生産科1年 ナシの栽培管理講習 第1回	福井農林高校生物生産科の科目「農業と環境」の果樹の栽培学習の一環として、本試の果樹園を利用して、研究員から学ぶナシの生態と品種についての学習および摘果実習と講義を行った。	5月24日	35	場内 園研C花き研究G
5	福井農林高校 課題プロジェクト学習支援 草花班第1回	福井農林高校 生物生産科3年生 草花班の科目「課題研究」の問題解決学習の支援ということで、本試花き研究Gにてキクの新品種作成を行った。	5月24日	3	場内 園研C花き研究G
6	福井農林高校 課題プロジェクト学習支援 草花班第2回	福井農林高校 生物生産科3年生 草花班の科目「課題研究」の問題解決学習の支援ということで、本試花き研究Gにてキクの新品種作成を行った。	5月29日	3	場内 園研C花き研究G
7	福井農林高等学校生物生産科2年 柿の栽培管理講習 第1回	福井農林高校生物生産科の科目「果樹」の果樹の栽培学習の一環として、福井農林高校の果樹園でカキの生態と品種についての学習および摘果実習と講義を行った。	5月29日	35	福井農林高校果樹園 園研Cウメ・果樹研究G
8	福井農林高校 課題プロジェクト学習支援 草花班第3回	福井農林高校 生物生産科3年生 草花班の科目「課題研究」の問題解決学習の支援ということで、本試花き研究Gにてキクの新品種作成を行った。	6月5日	3	場内 園研C花き研究G
9	福井農林高校 課題プロジェクト学習支援 作物班第1回	福井農林高校 生物生産科3年生 作物班の科目「課題研究」の問題解決学習の支援ということで、本試花き研究Gにてリムノカバへの窒素含有量の分析、土壌分析を行った。	6月5日	2	場内 有機環境部
10	福井県立福井農林高等学校生物生産科2年 視察	いちほまれの栽培研究の現場を観察し、いろいろな栽培手法について学習を行った。また、現在取り組んでいる研究活動について、作物部徳堂部長より講義を受けた。	6月5日	35	場内 作物部
11	福井農林高校 課題プロジェクト学習支援 作物班第2回	福井農林高校 生物生産科3年生 作物班の科目「課題研究」の問題解決学習の支援ということで、本試花き研究Gにてリムノカバへの窒素含有量の分析、土壌分析を行った。	6月14日	2	場内 有機環境部
12	福井県立坂井高等学校食農科学科1年 農業コース視察	新ブランド米「いちほまれ」の開発や栽培について、徳堂部長より講義を行う。併せて、ソバの小畝立て機、水田除草機の利用についての新技術の講義を受ける。その後、圃場の見学を行った。	6月23日	35	場内 作物部
13	福井農林高校 インターンシップ 5日間	※有機環境部 2名 水稲生育調査補助、圃場管理 ※ポストコシヒカリ開発部 2名 水稲生育調査補助、調査場の準備 ※ウメ・果樹研究G 2名 摘果、圃場管理	7月3日～6日	6	場内 ポストコシヒカリ開発部 園研Cウメ・果樹研究G
14	福井農林高校 課題プロジェクト学習支援 草花班第4回	福井農林高校 生物生産科3年生 草花班の科目「課題研究」の問題解決学習の支援ということで、本試花き研究Gにてキクの新品種作成を行った。	7月10日	3	場内 園研C花き研究G
15	福井県立農業クラブ連盟年次大会の審査および 講評	福井県内の農業を学習する生徒の年に1度の学習成果発表会に審査員として出席。農業の知識を競う競技会やプロジェクト発表会、意見発表会、平板測量競技会が行われた。	7月21日	480	福井農林高校 水場長 高度富農支援課長 館課長
16	福井農林高等学校生物生産科1年 ナシの栽培管理講習 第2回	福井農林高校生物生産科の科目「農業と環境」の果樹の栽培学習の一環として、本試の果樹園を利用して、ナシの収穫・選果・品質調査（糖度測定など）実習についての実習と講義を行った。	8月22日	34	場内 園研Cウメ・果樹研究G
17	福井県立若狭東高等学校地域創造科3年 いちほまれ収穫式 事前学習	いちほまれの栽培や特徴について、出前授業を行った。	9月7日	12	若狭東高校 福井米戦略課・企画指導部
18	福井県立若狭東高等学校地域創造科3年 いちほまれ収穫式 取り組み発表	小浜市太閤寺で行われた、いちほまれの初収穫において、若狭東高校の福作りとの比較調査発表を行った。	9月11日	12	小浜市太閤寺水田 福井米戦略課・企画指導部
19	福井県立若狭東高等学校地域創造科 スマート園芸講座（パブリカ・イチゴ・ミ ディトマトETC.）	同校地域創造科の生徒が園芸研究センターを訪れ、園芸研究センターの概要と、スマート園芸研究グループの研究概要の説明（ミディトマト、イチゴ、キュウリ）、LED補光を利用したミディトマト栽培について、視察研修を行った。	11月16日	5	園研C スマート園芸・野菜研究G
20	福井農林高校 いちほまれ講座の依頼	いちほまれの開発経緯などについてお話を伺い、食味を体験をお願いしたい。 ポストコシヒカリ開発部 両角悠作 主事	11月16日	35	場内 ポストコシヒカリ開発部
21	福井県立福井農林高等学校生物生産科2年生 カキの栽培管理（剪定）のポイントについて	農業試験場では、次世代を担う若手農業者を育成するため、農業高校と共働し、出前講座や試験場での実習授業を行っています。 カキの栽培管理（整枝・剪定）を理解してもらうため、研究員を派遣して授業を行う。	12月14日	27	福井農林高校 園研C ウメ・果樹研究G
22	福井県立福井農林高等学校生物生産科1年生 ナシの栽培管理（剪定）のポイントについて	前日からの降雪により、場内での授業が困難となった。また、当日朝も降雪と低温であったことから、中止と判断した。	中止 雪のため	0	場内 園研C ウメ・果樹研究G
23	福井県立福井農林高等学校 生物生産科 課題研究発表会 指導講評	同校生物生産科3年生の課題研究発表会に、指導講評者として依頼があった。 ウメ・果樹研究G 森川知彦 主事	1月24日	70	福井農林高校 園研C ウメ・果樹研究G

### 「中学校 出前授業講座など」

No.	授業名	内容	授業日	参加人数	場所・担当
1	夏休み郷土新聞づくり応援 いちほまれについて	中学校2年生の夏休みの宿題として、郷土新聞づくりの応援を行った。そのテーマに「いちほまれ」を取り上げた子供たちが来場し、いちほまれと農業試験場の概要について調べた。	6月23日	4	場内 企画指導部
2	福井市大東中学校地域探究活動	地域探究活動として、いちほまれに興味関心を持った生徒5名が来場した。農業試験場の概要やいちほまれの開発について学習し、場内の見学を行った。	6月28日	5	場内 企画指導部
3	夏休み郷土新聞づくり応援 いちほまれについて	中学校2年生の夏休みの宿題として、郷土新聞づくりの応援を行った。そのテーマに「いちほまれ」を取り上げた子供たちが来場し、いちほまれと農業試験場の概要について調べた。	7月29日	3	場内 企画指導部
4	夏休み郷土新聞づくり応援 いちほまれについて	中学校2年生の夏休みの宿題として、郷土新聞づくりの応援を行った。そのテーマに「いちほまれ」を取り上げた子供たちが来場し、いちほまれと農業試験場の概要について調べた。	8月25日	2	場内 企画指導部
5	福井市社中学校科学部視察	いちほまれができるまでを中心に、品種改良などについて、クラブ活動として訪れた。	10月16日	16	場内 企画指導部
6	わくワーク講座 講師派遣	成和中学校1年生対象のキャリア教育の一環として、さまざまな職業にかかわっている方からお話を聞き、中学卒業後の進路選択に役立てる。	2月21日	200	成和中学校 有機環境部

### 「小学校 出前授業講座など」

No.	授業名	内容	授業日	参加人数	場所・担当
1	鯖江市片上小学校出前授業 事前学習	社会科のお米づくりについて学習をしている。今年いちほまれが発表され、地域のお米づくりや新しい品種の育成について学習に来場した。小学校5年生。	6月9日	16	場内 企画指導部
2	福井市松本小学校 コシヒカリ、いちほまれの地を見学しよう	社会科のお米づくりについて学習をしている。いちほまれの開発、育成などについて、農業試験場を訪ねて、農業試験場でどのようなことが行われているのかを見学して、理解を深めた。	10月19日	110	場内 ポストコシヒカリ開発部
3	鯖江市片上小学校出前授業 いねづくり	社会科のお米づくりについて学習をしている。ポストコシヒカリ開発部の富田部長が、いちほまれの開発、育成などについて、学校に伺って子供たちに授業を行った。小学校5年生と鯖江市内の小学校の先生方。	6月20日	50	鯖江市片上小学校 ポストコシヒカリ開発部
4	坂井市兵庫小学校出前授業	小学校4年生の理科の授業に合った、いちほまれとコシヒカリのことについて、小林主任研究員が授業を行った。	10月5日	25	坂井市兵庫小学校 ポストコシヒカリ開発部
5	坂井市鳴鹿小学校5年生 いちほまれの誕生の話と農業試験場の仕事について	社会科のお米づくりについて学習をしている。ポストコシヒカリ開発部の富田部長が、いちほまれの開発、育成などについて、学校に伺って子供たちに授業を行った。富田部長が対応。	10月11日	19	坂井市鳴鹿小学校 ポストコシヒカリ開発部
6	いちほまれ給食における特別授業	ふくいの新ブランド米いちほまれを子供たちが味わい、学習することを通して愛着を深めるとともに、食文化への理解や関心を亦める	11月6日	12	永平寺町吉野小学校 ポストコシヒカリ開発部
7	春江西小学校「いちほまれ」食味検査体験学習	いちほまれの誕生経過のお話といちほまれとそれ以外のお米の食味体験学習会。	11月7日	106	坂井市春江小学校 ポストコシヒカリ開発部
8	坂井市東十郷小学校 イネの歴史や栽培について（見学）	社会科のお米づくりについて学習をしている。作物部の徳堂部長が、お米作りの歴史や今昔について、いちほまれの開発、育成などについて、授業を行った。	11月10日	70	場内 作物部

### 「県内視察見学など」

No.	視察見学者	内容	視察見学日	参加人数	場所・担当
1	岡保児童クラブ視察	地域の施設を知ることや、秋休みを利用していちほまれについて、話を聴きにいられた。また、展示コーナーや実験室などを見学した。	10月17日	4	場内 企画指導部
2	大飯町 土の会 研修会 いちほまれの開発経緯について	いちほまれの開発経緯などについてお話を伺いたいと依頼。	11月22日	24	場内 ポストコシヒカリ開発部
3	杉谷 美緑 様 視察	職業訓練校の授業の課題政策の為にいちほまれの質問に来場	12月12日	1	場内 企画指導部
4	高志みどりクラブ例会 講師依頼	高志みどりクラブの会員の活動概要を報告し、意見交換を行った。	11月13日	12	福井県職員会館 有機環境部
5	知財広め隊セミナーin福井 いちほまれの開発経過と特徴	日本弁理士北陸支部のセミナーの一部として、いちほまれの開発経過と特徴と題して、講演を依頼。	11月17日	50	福井県中小企業産業大学校 ポストコシヒカリ開発部

「県内視察見学など」続き

No.	視察見学者	内容	視察見学日	参加人数	場所・担当
6	福井県児童科学館 エンゼルランドふくい コミュラボ・コラボ あたらしいお米ができるまで～いちほまれの ひみつ～	福井県児童科学館の参加型科学実験教室として、出前講座を行った。親子でいちほまれの秘密やどのようにできるかを、町田主事による解説と体験で学ぶ教室であった。	10月8日	25	福井県児童科学館 エンゼルランドふくい ポストコンヒカリ開発部
7	福井県児童科学館 エンゼルランドふくい コミュラボ・コラボ 野菜や果物の甘さを測ってみよう	福井県児童科学館の参加型科学実験教室として、出前講座を行った。野菜や果物の甘さについて、親子で講話と実験で理解していただいた。そして、試験場におけるブドウやトマトなどの甘さの秘密について、佐藤主研と森川主事による解説と体験で学ぶ教室であった。	10月22日	30	福井県児童科学館 エンゼルランドふくい 園研C スマート園芸・野菜研究G # ウメ・果樹研究G
8	ふくい理数グランプリ 理数ゼミ	ふくい理数グランプリで優秀な成績を受賞した児童と生徒へ、ふくい新ブランド米いちほまれの開発の経緯、どのような手法で取り組んできたのかを紹介した。そして、児童生徒たちに科学へ興味関心を持ってもらう機会となった。	12月10日	70	福井大学 ポストコンヒカリ開発部
10	松本公民館教育事業 コンヒカリ生誕地 米料理コンテスト	コンヒカリの生誕地を記念したイベントとして地元公民館主催のコンテストに審査員として、参加した。審査員として、町田主事が伺った。	10月1日	20	松本公民館 ポストコンヒカリ開発部
9	福井県農友会県庁職域会	講演内容：福井の新しいお米 いちほまれ ポストコンヒカリ開発部 町田芳恵 主事	3月19日	40	AOSSA ポストコンヒカリ開発部

「来て見て食べて！農業・漁業発見デー」 4月29日（土・祝）10:00～15:00 【於：園芸研究センター】

No.	体験名	内容	担当	対象・参加人数
1	研究パネル等展示	各研究機関の研究概要パネルや珍しい農業機械等の展示、クイズラリー	園芸研究センター・ 水産試験場・嶺南牧場 研究員等 8名	一般 400名
2	スマートアグリハウス公開	総合的環境制御によるミディトマトの試験研究紹介	園芸研究センター研究員 2名	一般 50名
3	研究成果の食材試食	水産試験場、園芸研究センターの成果品であるマハタ（味噌汁）、ミディトマトの試食会	園芸研究センター・水産試験場 研究員等 8名	一般 400名
4	ウメシロップづくり	冷凍ウメを使ったウメシロップづくり体験	園芸研究センター研究員 3名	小学生・保護者 100名
5	若狭牛とのふれあい	放牧した若狭牛との直接的なふれあいと記念撮影	嶺南牧場 2名	小学生・保護者 50名
6	小さな水族館	マハタ・フグの稚魚展示、お魚下敷き作り	水産試験場 3名	小学生・保護者 100名
7	園芸相談	果樹、野菜等の栽培管理についてのアドバイス	園芸研究センター 園芸振興相談員 1名	一般 10名

「JCスクール2017」職業体験協力事業所として参画 9月23日（土・祝）9:30～12:00 【於：美浜町北西郷公民館】

No.	体験名	内容	担当	対象・参加人数
1	園芸研究業務紹介	・園芸研究センターの研究概要紹介 ・試験研究成果等のパネル展示 ・ウメシロップづくり体験	園芸研究センター研究員 2名	小学生 150名

「福井工業高等専門学校 スマート園芸研究見学」受入 10月13日（金）13:00～15:00 【於：園芸研究センター】

No.	体験名	内容	担当	対象・参加人数
1	スマート園芸施設の現状見学	・園芸研究センターの研究概要紹介 ・スマート園芸によるミディトマト栽培の現状見学	園芸研究センター研究員 1名 園芸振興相談員 1名	高等専門学校生 15名

「美浜中央小学校 (1、2年生) 校外学習」受入 10月18日(水) 10:00~11:30 【於：園芸研究センター】

No.	体験名	内 容	担当	対象・参加人数
1	ミディトマト栽培見学とウメシロップづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園芸研究センターの研究概要紹介</li> <li>・ミディトマトのハウス栽培見学</li> <li>・ウメシロップづくり体験</li> </ul>	園芸研究センター研究員 3名 園芸振興相談員 1名	小学生、教諭 50名

「コミュラボコラボ」体験講座開催 10月22日(日) 13:30~16:00 【於：エンゼルランドふくい】

No.	体験名	内 容	担当	対象・参加人数
1	野菜や果物の甘さを計ってみよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園芸研究センターの研究概要紹介</li> <li>・野菜・果物の糖度測定体験</li> </ul>	園芸研究センター研究員 2名	小学生 40名

「美浜中学校 社会体験活動」受入 11月7日(火)~8日(水) 8:30~16:30 【於：園芸研究センター】

No.	体験名	内 容	担当	対象・参加人数
1	職場体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミディトマト、キュウリの収穫体験</li> <li>・ミディトマトの交雑体験</li> <li>・果樹の糖度・酸度測定体験等</li> </ul>	園芸研究センター研究員 3名 園芸振興相談員 1名	中学生 1名

「若狭東高等学校 スマート園芸研究見学」受入 11月16日(木) 13:30~15:00 【於：園芸研究センター】

No.	体験名	内 容	担当	対象・参加人数
1	スマート園芸施設の現状見学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園芸研究センターの研究概要紹介</li> <li>・ミディトマト・イチゴのスマート園芸栽培の現状見学</li> </ul>	園芸研究センター研究員 2名 園芸振興相談員 1名	高校生、教諭 7名

「みはまナビフェス2017」(産業部門) 参画 11月11~12日(土・日) 9:00~16:00 【於：園芸研究センター】

No.	体験名	内 容	担当	対象・参加人数
1	ミディトマト・ブドウ等の成果物・研究パネル等の展示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミディトマト・キュウリ・ブドウ・越前水仙等の成果物展示</li> <li>・研究成果等のパネル展示</li> <li>・地中熱利用システムの紹介</li> <li>・スマート園芸の紹介</li> </ul>	園芸研究センター研究員 4名	一般 200名

「第20回梅まつり」(タイアップイベント) 参画 3月3日(土) 9:00~16:00 【於：西田公民館前】

No.	体験名	内 容	担当	対象・参加人数
1	園芸研究の紹介とウメシロップづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究成果等のパネル展示</li> <li>・ウメシロップづくり体験</li> </ul>	園芸研究センター研究員 2名	一般 150名

## (2) 園芸教室

地域の園芸振興を図るため、野菜を中心とした栽培技術の基礎を習得する場として、農業者だけでなく広く地域住民を対象に年間を通して開催した。講義中は受講者から積極的に質問が出される等、関心の高さが窺われた。また、毎回配布される講師手作りの資料は分かりやすいと好評であった。

「園芸教室」4月18日(火)～12月19日(火) ※定期的に開催9:30～11:30 【於：園芸研究センター】

No.	開講日	講義内容	担 当	対象・参加人数
1	4月18日	開講式 土づくりと施肥 春播き主要野菜の栽培ポイント	園芸研究センター 所長・課長 宮原講師・園芸振興相談員	一般・農楽舎生 38名
2	5月16日	果菜類の整枝と夏野菜の追肥および ミニ野菜の栽培	園芸研究センター 宮原講師・園芸振興相談員	一般・農楽舎生 35名
3	6月20日	野菜の病害虫と防除のポイント	園芸研究センター 宮原講師・園芸振興相談員	一般・農楽舎生 31名
4	7月18日	夏播き野菜の栽培ポイント	園芸研究センター 宮原講師・園芸振興相談員	一般・農楽舎生 31名
5	8月22日	夏播き野菜類を美味しく作ろう 草花の鉢植えを楽しもう	園芸研究センター 宮原講師・園芸振興相談員	一般・農楽舎生 33名
6	9月19日	ミニ野菜の栽培のポイント	園芸研究センター 宮原講師・園芸振興相談員	一般・農楽舎生 34名
7	10月17日	夏播き野菜類の主要病害虫と防除ポイント 果物づくりを楽しもう	園芸研究センター 宮原講師・園芸振興相談員	一般・農楽舎生 30名
8	11月21日	来年の野菜づくりに備えて①	園芸研究センター 宮原講師・園芸振興相談員	一般・農楽舎生 28名
9	12月19日	来年の野菜づくりに備えて② 閉講式	園芸研究センター 宮原講師・園芸振興相談員 所長・課長	一般・農楽舎生 28名

(3) 農業試験場プレスリリース実績

No.	日付	プレスリリース内容	担当部署
1	4月25日	新品種「越南291号」の原種の播種がはじまる	作物部
2	4月29日	「農業試験場ポストこしひかり体験デーGW」を開催	企画・指導部
3	5月20日	新品種 いちほまれ 田植え体験会を開催	企画・指導部
4	6月12日	ソバの収量を高める「小畦立て播種法の実演会」	作物部
5	6月23日	安全な資材によるトマト施設の土壌消毒の研修会	企画・指導部
6	7月29日	「いちほまれ観察会・農業試験体験デー」を開催	企画・指導部
7	7月31日	モモ・スモモ栽培推進研修会を開催（会場：園芸研究センター）	園芸研究センター
	8月7日	モモ・スモモ栽培推進研修会を開催（会場：JAはるえ本店）	
8	8月22日	福井農林高校梨実習ナシの収穫・選果実習（ナシの収量、品質調査）	園芸研究センター
9	9月17日	いちほまれ稲刈り体験会	企画・指導部
10	12月14日	農業高校生を対象にナシの栽培管理（製枝・剪定）の授業	企画・指導部
11	12月14日	農業高校生を対象にカキの栽培管理（製枝・剪定）の授業	企画・指導部

(4) 平成29年度 福井県農業試験場技術講座

No	日付	講座内容	講師名		
			所属部	職	氏名
	参加者数	会場	依頼者		
			所属	職	氏名
1	11月21日	生き物にやさしい米づくり	有機環境部	主事	竹内早希子
	100名	福井県生活学習館3階映像ホール	地域農業課	主事	多田朱里
2	12月19日	生き物にやさしい米づくり	有機環境部	主事	竹内早希子
	50名	越前文化センター小ホール	福井県有機農業推進ネットワーク	事務局	宇野晃成
3	2月28日	クリムソンクローバーを利用した美味しい米づくり	作物部	主任	酒井 究
	30名	芦原温泉白和荘	坂井地区農業士会	主任	飯野清幸

## 5. 農業者、消費者との意見交換

- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：名称発表会（椿山荘 4月19日 東京都）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：料理王国 7月号取材（椿山荘 4月19日 東京都）
- ・富田桂：電気新聞 取材（4月25日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子：朝日新聞 福井支局取材（4月27日 福井県農業試験場）
- ・富田桂、町田芳恵：わんぱくフェア（健康の森 4月30日 福井市）
- ・富田桂：FBCラジオ「良ーいドン！」（FBC 5月3日 福井市）
- ・富田桂、小林麻子：わんぱくフェア（美浜町きいばす 5月4日 美浜町）
- ・富田桂、小林麻子、中岡史裕 FBCラジオ「おじゃまっテレ」（FBC 5月4日 福井市）
- ・小林麻子：FBCラジオ「よろず屋ラジオ」（FBC 5月5日 福井市）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：いちほまれ田植式（5月15日 永平寺町）
- ・小林麻子：NHK BSプレミアム「美と若さの新常識〜カラダのヒミツ」取材（5月18日 福井県農業試験場）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵：ftv「おかえりなさい」番組冒頭田植体験PR（西武前 5月18日 福井市）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：FBC「おじゃまっテレ」田植体験（5月20日 福井県農業試験場）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：まちかど県政収録（田植体験取材）（5月20日 福井県農業試験場）
- ・中岡史裕：アドバンスファーマー研修会（JA福井市 5月25日 福井市）
- ・富田桂、小林麻子、中岡史裕：六本木ヒルズ田植イベント（六本木ヒルズ 5月27日 東京都）
- ・町田芳恵、中岡史裕、両角悠作：全国城下町シンポジウム（福井中央公園 5月28日 福井市）
- ・町田芳恵、中岡史裕：新任職員集合研修（ビジネスセンター 5月31日-6月1日 越前市）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、両角悠作：花花フェスブース出展（福井中央公園 6月3日-4日 福井市）
- ・町田芳恵：福井県農業協同組合視察対応（6月8日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：「西Navi北陸」取材（6月8日 福井県農業試験場）
- ・富田桂、中岡史裕：ふれあい特産市（ハピテラス 6月15日 福井市）
- ・富田桂：上野駅出向宣伝（観光振興課）（JR上野駅 6月16日-17日 東京都）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：FBCリレーマラソンin芝政ステージPR（芝政 6月18日 坂井市）
- ・富田桂：福井県立大学大学院講義（6月19日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：いちほまれ開発授業（片上小学校 6月20日 鯖江市）
- ・富田桂：ふれあい特産市（JA敦賀美方 6月22日 敦賀市）
- ・町田芳恵、中岡史裕：福井大学産学官連携本部協力会：経済同友会（パレスホテル 6月28日 福井市）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：県HP作成インタビュー（6月30日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：JA花咲実践農場参観デー（JA花咲ふくい 7月1日 坂井市）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：みずほ銀行発行冊子（1億円以上預金者向け）（7月7日 福井県農業試験場）
- ・町田芳恵：和穀の会 米取扱い説明会（7月9日 東京都）
- ・富田桂：日本文教出版(株) 教科書掲載営業活動（7月11日 大阪市）
- ・両角悠作：福井県立大学地域生物生産授業（7月14日 福井県農業試験場）
- ・中岡史裕：ふれあい特産市（JA福井市南部 7月15日 JA福井市南部）
- ・富田桂：いちほまれ試食会（白鶴銀座天空農園 7月17日 東京都）
- ・町田芳恵：福井県みどり会総会（アオッサ 7月19日 福井市）
- ・富田桂：FBCおじゃまっテレ取材（7月19日 福井県農業試験場）

- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：電気新聞取材（7月20日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：ふくい技術士交流会（福井中央公民館 7月22日 福井市）
- ・富田桂：公開講座（消費者対象）（福井中央公民館 7月22日 福井市）
- ・中岡史裕：キリンビール福井一番の会（ユアーズホテルフクイ 7月25日 福井市）
- ・町田芳恵：ガス大量炊飯指導（南部学校給食C 7月27日 福井市）
- ・町田芳恵：ガス大量炊飯指導（パール精米・農試精米比較）（（株）しゃりー 7月28日 福井市）
- ・小林麻子：キリンビール(株)福井大乾杯イベント（ハピテラス 7月28日 福井市）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、両角悠作：いちほまれ観察会（7月29日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子、町田芳恵：女性財団機関誌（小会議室 7月31日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子：NHK BSプレミアム「美と若さの新常識～カラダのヒミツ」取材（2回目）（8月10日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：西ナビ取材（8月10日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子：月刊「自治研」10月号取材（8月22日 福井県農業試験場）
- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、中岡史裕：ロゴデザイン・パッケージ発表会（椿山荘 8月24日 東京都）
- ・富田桂：東京書籍(株)教科書掲載営業活動（8月29日 東京都）
- ・町田芳恵：るるぶ JTB パブリッシング取材（8月31日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：伊勢丹いちほまれ受注会（ホテルニューオータニ 9月1日～2日 東京都）
- ・富田桂：FMふくい収録（FM福井 9月6日 福井市）
- ・富田桂：福井新聞（いちほまれ系譜について）（9月7日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子：JA広報誌取材（9月7日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：にっぽん全国ふくむすび（9月8日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子、町田芳恵：ウェブ番組ライスTV取材（9月14日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子：NHK BSプレミアム「美と若さの新常識～カラダのヒミツ」取材（3回目）（9月15日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：農業試験場「いちほまれ」収穫祭（9月17日 福井県農業試験場）
- ・富田桂、小林麻子：六本木ヒルズ収穫イベント（六本木 9月23日 東京都）
- ・富田桂、小林麻子：販売開始イベント「いちほまれ誕生祭」（日本橋三越 六本木ヒルズアリーナ 9月23日 東京都）
- ・町田芳恵：日本橋三越でPR（日本橋三越 9月25日～26日 東京都）
- ・町田芳恵：松本公民館食の行事（松本公民館 10月1日 福井市）
- ・富田桂：おはようふくいセブン取材（10月2日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子：いちほまれ開発授業（兵庫小学校 10月5日 坂井市）
- ・富田桂：TBSラジオ森本毅郎スクハイ（10月5日 電話取材）
- ・富田桂：福井新聞（子ども新聞）（10月7日 福井県農業試験場）
- ・富田桂、両角悠作：ふくい新米フェア（ハピテラス 10月7日～8日 福井市）
- ・町田芳恵：児童科学館講座（県児童科学館 10月8日 坂井市）
- ・小林麻子：新米食べ比べ昼食会（ユアーズホテル（橘） 10月10日 福井市）
- ・町田芳恵：ごはんの美味しさの説明（伊勢丹 10月14日 東京）
- ・富田桂：新米のある暮らしフェア（伊勢丹立川店 10月14日～15日 東京都）
- ・富田桂：るるぶキッチン取材（赤坂 10月21日 東京都）
- ・町田芳恵：丸の内朝大学（丸の内 10月25日 東京都）
- ・富田桂：いちほまれ学校給食授業（吉野小学校 11月6日 永平寺町）
- ・富田桂：いちほまれ食味体験授業（春江西小学校 11月7日 坂井市）

- ・富田桂、小林麻子、町田芳恵、両角悠作：日本水稲品質・食味研究会におけるいちほまれPR（グランユアーズ 11月11日 福井市、11月12日 福井県農業試験場）
- ・両角悠作：福井農林高校 いちほまれのおいしさの授業（11月16日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子：日本料理「一凛」でのいちほまれPR（11月17日 東京）
- ・富田桂：「いちほまれ」の開発 弁理士協会講演会（11月17日 福井市）
- ・富田桂：日本料理「一凛」でのいちほまれPR（11月18日 東京）
- ・小林麻子：仁愛女子高校授業（グローバルインコース）（11月18日 福井市）
- ・富田桂：JA若狭大飯支店営農課 大飯町土の会視察対応（11月22日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：「ほんまもん原田年晴です！」 ラジオ大阪電話取材（11月29日 福井県農業試験場）
- ・小林麻子、町田芳恵：丸の内朝大学（11月29日 東京）
- ・富田桂：「こしの国ケーブルテレビ」いちほまれ取材（12月5日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：福井県理数グランプリ受賞者に対する講演（12月10日 福井大学）
- ・富田桂：千葉県長生村農業委員会視察対応（12月25日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：新丸ビルシェフ視察対応（1月18日 福井県農業試験場）
- ・富田桂：静岡県御殿場市農政課農作業受託組合視察対応（1月18日 福井県農業試験場）
- ・町田芳恵：福井テレビ 「いちほまれの開発」収録（福井テレビ 2月20日 福井市）
- ・富田桂、町田芳恵：パナソニック炊飯器、Wおどり炊き 宣伝取材（2月26日 福井県農業試験場）
- ・町田芳恵：新丸ビルレストランフェア（3月8日 東京）
- ・町田芳恵：福井農林高校同窓会 農友会県庁職域会講演「いちほまれの開発」（3月19日 福井市）
- ・富田桂：和歌山県伊都振興局内 天野土地改良区視察対応（3月15日 福井県農業試験場）

## 6. 論文、雑誌、著書、発表、広報等

### (1) 農業試験場刊行成績書

刊 行 成 績 書	部 所 名
平成 28 年度 福井県農業試験場研究報告	福井県農業試験場
平成 29 年度水稲新品種育成成績書	ポストコシヒカリ開発部
平成 29 年度水稲・麦・大豆栽培・営農作業・種子生産技術試験成績書	作物部
平成 29 年度水稲関係除草剤試験成績書	作物部
平成 28 年度 病害虫に関する試験成績	有機環境部
平成 28 年度 植物防疫年報	病害虫防除室

### (2) 論文

- ・富田桂：福井県の新しいブランド米「いちほまれ」の開発 北陸作物学会報 第 53 号（2018）p 67-68
- ・両角悠作、小林麻子、富田桂：福井県の水稲奨励品種を判別する SSR マーカーセットの改良 北陸作物学会報第 53 号（2018）p 50 ~ 52
- ・Asako Kobayashi, Kiyosumi Hori, Toshio Yamamoto, Masahiro Yano :Koshihikari: a premium short-grain rice cultivar - its expansion and breeding in Japan. Rice (in press)

### (3) 学会等講演発表

- ・小林麻子:ポストこしひかり品種「いちほまれ」の開発 (特別講義(生産・環境生物専攻大学院生)) (東京大学 2017.6.23 東京都)
- ・小林麻子:突然変異と自然変異を利用したアミロペクチンの改変による食味のデザイン (シンポジウム「競争力の高い水稲品種開発に向けたDNAマーカー技術の活用と連携」 2017.6.28 東京大学)
- ・富田桂:福井県の新しいブランド米「いちほまれ」の開発 (北陸作物育種学会 第54回 講演会・シンポジウム 2017.7.14 新潟県)
- ・小林麻子:超越光优质食味品種“一誉”選育(北方稲作科学技術協会 第十五届粳稻发展论坛 2017.7.14-16 中国・寧夏)
- ・小林麻子、富田桂、町田芳恵、中岡史裕、両角悠作、林猛、田野井真、渡辺和夫、酒井究、清水豊弘:水稲新品種「いちほまれ」の育成(日本育種学会 第132回講演会 2017.10.8 岩手大学)
- ・Yasuhiro USUI, Hidemitsu SAKAI, Takeshi TOKIDA, Hirofumi NAKAMURA, Hitomi WAKATSUKI, Asako KOBAYSHI, Hiroshi NAKAGAWA, Mayumi YOSHIMOTO, Toshihiro HASEGAWA: Impact of the accumulation of QTLs for heat tolerance on grain appearance quality of rice and differences among cultivars and years under Free-Air CO<sub>2</sub> Enrichment (FACE) (American Society of Agronomy Meeting 2017 2017.10 Florida, USA)
- ・小林麻子、圓山恭之進、櫻井哲也:複数の遺伝子/QTLの集積による高温耐性品種・育種素材の開発(気候変動対策プロジェクト研究成果発表会 2018.2.14 一橋大学)
- ・町田芳恵、小林麻子、中岡史裕、両角悠作、富田桂:水稲新品種「いちほまれ」の食味特性(日本育種学会 第133回講演会 2018.3.25 九州大学)
- ・小林麻子、圓山恭之進、櫻井哲也、富田桂:異なる遺伝背景における高温登熟耐性QTLの集積効果(日本育種学会 第133回講演会 2018.3.25 九州大学)
- ・坂本浩:「カリ肥料施用による露地小ギクの切花品質向上」(園芸学会北陸支部 平成29年12月1日)
- ・猿橋由恵:「ウメ‘福太夫’の成熟に伴う果色と果実硬度の関係」(園芸学会北陸支部 平成29年12月1日)
- ・森川知彦:「ブドウ‘シャインマスカット’のトンネル栽培における新梢管理法の違いが果実品質に及ぼす影響」(園芸学会北陸支部 平成29年12月1日)
- ・赤堀巧:「ウメ‘福太夫’の完熟落果予測」(園芸学会北陸支部 平成29年12月1日)
- ・福島健司:「イチジク‘柵井ドーフィン’の早期摘心による収穫盛期分散効果」(園芸学会北陸支部 平成29年12月1日)
- ・坂本浩・和田陽介:「希釈殺ダニ剤液浸漬濾紙によるハダニ類感受性簡易検定法の開発」(北陸病害虫研究会 平成30年2月16日 金沢市)

### (4) 著書

- ・小林麻子:高温耐性品種の育成とその遺伝的要因の解明—外観品質を主にして— (「米の外観品質・食味—最新研究と改善技術—」 松江勇次編著、養賢堂)

### (5) 広報

#### ①日本農業新聞 アグリトゥモロウ

- ・雑草地管理による斑点米防除: 有機環境部 廣瀬美咲
- ・強雨でも発芽が安定する播種法を開発: 作物部 高橋正樹
- ・トンボにやさしい農薬と水管理: 有機環境部 竹内早希子

- ・乗用水田除草機活用のポイント： 作物部 土田政憲
- ・樹高切り下げと摘蕾で大玉生産：園研センター 中川文雄
- ・今年の稲作を振り返って： 企画・指導部 山口泰弘
- ・イチジクのおすすめ品種紹介： 園研センター 森川知彦
- ・ウメ・タマカタカイガラムシ防除技術： 園研センター 赤堀巧
- ・ニンニクのウイルス病害防除： 有機環境部 宮永智悠

## 7. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞

### (1) 職員の国内・国外研修

氏名	研修内容	期間	派遣先
中岡史裕	最新の水稲ゲノム情報を利用した突然変異育種技術の習得	10月2日-12月28日	次世代作物開発研究センター (茨城県つくば市)

### (2) 客員教授の招聘

アドバイザーボード；

- ・平成29年7月4日-5日

安藤美紀子氏 (伊藤忠食糧株式会社 米穀営業第一部 米穀サポート室)

「伊藤忠食糧での業務用米、求められる業務用米、福井県新品種の検査結果」

- ・平成29年10月31日-11月1日

長谷川誠氏 (株式会社ファンケル 総合研究所 機能性食品研究所 食品開発グループ)

「発芽玄米を中心とした機能性米の現状と今後求められる機能性米について」

- ・平成29年12月11日-12日

岡田聡史氏 (神戸大学大学院農学研究科 資源生命科学専攻 植物遺伝資源開発学研究室)

「酒造好適米に必要な特性とその評価方法について」

## 8. 一般報告

### (1) 施設

① 本場	福井市寮町辺操 52-21	
	本場本館（鉄筋3階建）	2,524.52 m <sup>2</sup>
	作業室その他 64棟（農業研修館、近代化センター含む）	8,802.03 m <sup>2</sup>
	計	11,326.55 m <sup>2</sup>
	水田圃場	39,528.00 m <sup>2</sup>
	原種圃場	39,220.00 m <sup>2</sup>
	そ菜および普通畑	10,533.20 m <sup>2</sup>
	果樹園	18,176.00 m <sup>2</sup>
	敷地および水路	67,556.20 m <sup>2</sup>
	山林その他	118,820.74 m <sup>2</sup>
	計	293,834.14 m <sup>2</sup>
② 園芸研究センター	三方郡美浜町久々子 35-32-1	
	本館（鉄筋2階建）	1,152.91 m <sup>2</sup>
	収納調査棟その他 14棟	2,497.82 m <sup>2</sup>
	計	3,650.73 m <sup>2</sup>
	宅地	108.76 m <sup>2</sup>
	田	21,071.50 m <sup>2</sup>
	畑	52,587.60 m <sup>2</sup>
	原野	1,878.80 m <sup>2</sup>
	雑種地	3,637.30 m <sup>2</sup>
	計	79,283.96 m <sup>2</sup>

### (2) 予算

#### ① 歳入（平成29年度決算 3月10日現在）

項目	決算額(千円)	摘要
使用料	66	行政財産使用料
財産運用収入	833	建物貸付料、特許権等実施料
財産売払収入	10,508	農産物売払代
雑入	1,281	保険料被保険者負担金、電気料・水道料個人負担金、その他
計	12,688	

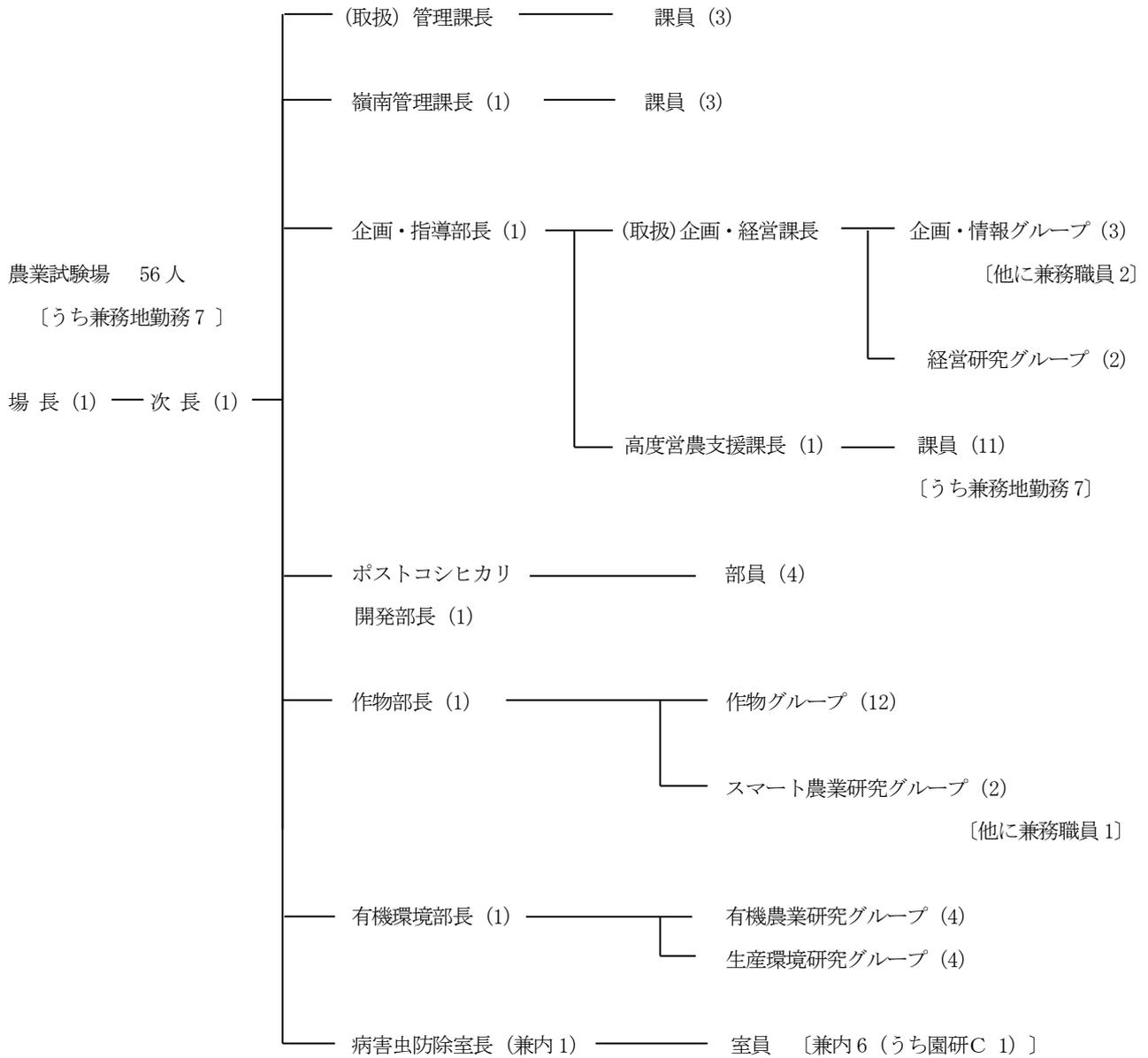
② 歳 出 (平成29年度決算 3月10日現在)

項 目	決算額(千円)	摘 要
本 場 運 営 費	83,617	農業試験場の維持管理、人件費、職員旅費
試 験 場 運 営 費	40,393	園芸研究センター・圃場・母樹園等の維持管理、人件費、職員旅費
職 員 旅 費	5,900	農業試験場・園芸研究センター出張および研修旅費

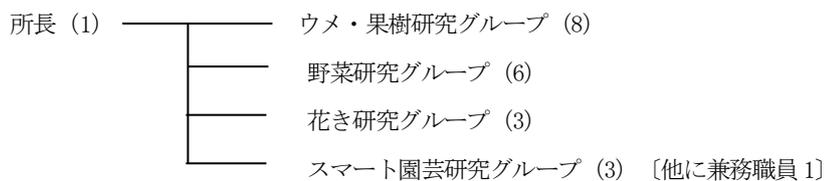
戦 略 的 研 究 開 発	56,594	中山間地における高収益技術体系に確立、大規模施設園芸におけるアレンジムム高品質周年栽培技術の確立、福井発の五ツ星ブランド水稻新品種の育成、新たな需要を生む機能性ライスの開発
戦略的研究開発（園研C）	4,402	スペシャルミディトマトの新品種育成、ブドウの新品種育成、地中熱利用システムによる周年栽培技術の開発、大規模施設園芸におけるアレンジムム高品質周年栽培技術の確立
ニーズ対応型研究開発	3,206	水稻の良食味性の科学的解明—おいしさの見える化—
農 林 水 産 の 技 術 開 発	999	行政・普及からの要請にもとづく試験研究課題
地域科学技術振興研究事業	36,440	ふくいオリジナル酒米品種の開発、水田でできるブドウの減農薬・減化学肥料のコンテナ栽培技術の開発、生き物にやさしい“ポストこしひかり”特栽培技術の開発、スマートアグリ技術の開発ミディトマト・パプリカ・夏イチゴ、水田地帯における省力・高品質果樹生産技術の開発、完熟ウメ生産・流通技術の開発、初夏どり白ネギの生産安定技術の開発、ネギ軟白部褐色斑症状の原因究明と防除技術の確立、越前スイセンの切り花品質向上技術の確立、調理加工専用米の選抜技術の確立
農 業 総 務 費	2,334	試験研究企画、農林水産情報システム事業、農林水産新技術等習得事業、伝統地場農産物等原種事業、ふくいアグリネット維持費 等
農 業 経 営 対 策 費	1,923	大苗養成事業、果樹モデル実証
農 作 物 対 策 費	10,293	基本調査事業、原原種原種ほ設置事業、優良種子生産体制確立事業、肥料検査登録事業、土壌由来温室効果ガス事業、モニタリング調査事業、基準点調査事業、ポスコン生産対策事業、農業機械利用技能高度
農 業 改 良 普 及 費	2,797	普及指導員研修費、県域普及員活動費、農山漁家生活近代化センター費
植 物 防 疫 費	4,905	農薬抵抗性検定事業、病害虫発生子察事業、病害虫防除所運営事業、減農薬防除体系実証事業、重要病害虫等侵入警戒事業 等
財 産 管 理 費	131	県有自動車管理費
計	248,034	

### 3 組織と職員数

(平29. 4. 1現在)



(附置機関) 園芸研究センター 21人



職員数 77名〔うち兼務地勤務7〕

(事務職員 20名、技術職員 15名〔7名〕、研究職員 39名、技能労務職員 1名、相談員 1名、その他 1名)

4 人 事

職 種 別 人 員

(平29. 4. 1現在)

職 名	行 政 職		研究職	技 能 労務職	権 員	その他	計	備 考
	事務	技術						
技術職員 場 長			1				1	
事務職員 次 長	1						1	
課 長	1						1	
主 任	1						1	うち 併勤1 (教育庁より) 1
企 画 主 査	8						8	
主 査	5						5	
主 事	3						3	うち 再任用職員 1
技術職員 部長・所長		1	4				5	
課 長		1					1	
主 任		12					12	うち 兼勤1 (食品加工研究所より)
企 画 主 査		1					1	うち 兼務地勤務 7
主任研究員			16				16	うち 兼勤1 (食品加工研究所より)
研 究 員			1				1	
主 事			17				17	うち 再任用職員 5
農業技術員				1			1	
臨時任用職員	1						1	
嘱託					1		1	(園芸振興相談員)
事務補助員						1	1	うち 再雇用職員 1
計	20	15	39	1	1	1	77	うち 併勤1 (教育庁より) 1 うち 兼勤2 (食品加工研究所より) うち 兼務地勤務 7

5 主な備品等 (平成29年度、50万円以上)

品名	数量	金額(円)	型式
穀物乾燥機	1	1,185,840	三菱 HD-31MR
種子用コンバイン	1	4,590,000	キセキ HFR338GTARLW
田植機	1	1,795,608	キセキ NP60GLF
自走自脱型脱穀機	1	1,002,218	ヤンマーPKD70
薬用保冷庫	1	619,920	MPR-715F-PJ
空撮用ドローン	1	1,306,800	SkyLinkJapan3DR SOLO
農薬散布用ドローン	1	2,592,000	MMC940AC
テンシプレッサー	1	4,168,800	タケモト MyBoy II
ケルダール分解システム	1	1,717,200	ゲルハルトジャパン KT20S
8条播種機	1	1,138,320	矢崎 RXGSB-824RSV
農業用ICTブルドーザ	1	20,520,000	コマツ D21PL-8
超砕土形成ロータリー	1	626,400	クボタ RT416
蒸気土壌消毒機	1	4,914,000	丸文 SB-400
微霧冷房加湿システム	1	2,039,040	いけうち CoolBIM
地中熱利用空調システム	1	8,424,000	積水アクアシステム
フォークリフト	1	1,879,200	コマツ FG20T-17
土壌・作物体総合分析装置	1	4,860,000	富士平工業(株) SFP-4i
乗用草刈機	1	857,304	筑水キャニコム ヘイマサオ CM2201YC007
農業用運搬車	1	1,017,900	筑水キャニコム ライガー ELL802MPW1